

るに似るらしい。其處に自分は早く異議があることを斷言する。

蓋し廣義に所謂教育なるもの、概念は、從來未だ必ずしも一致してゐない。其の最も廣く行はれたものは、凡そ教育とは成熟者が未成熟者の上に施す具案的且つ有目的の干渉で、存続的効果を得んことを期するものだ云ふのである。これは教育の形式を抽象的に極論したならばそんなものに成るかも知れないが、それでは何となく餘りに漠然としてゐる憾がある。そこで更に内容の方から觀て、教育は社會的文化の遺産を傳授し相續せしめるものだ云ふ説が、近頃は一般に行はれて來てゐる。併しそれにも又二つの異つたる批難がある。その一は吾儕は只舊來の社會的文化を傳授し相續する爲に教育されやうとはしない。寧ろ先づ一個人として心身共に立派に鍛練し、出来るだけ十分に發達させたいと望む方が主だ云ふの、マウ一つは舊來の社會的文化の傳授相續では足りない。それは必ず更に改良し進歩し乃至新に創造して行かなければならないと云ふのだが、尙ほ他の方面より觀察するに、教育と謂ふものは何も必ずしも他人がして呉れるものばかりでなく、随分自分で工夫する所も多々あると見られる。

そこで自分は色々熟考の末、教育を釋義して、左の通りに曰ふことをした。即ち教育とは

自己又は他人に由つて、各人の自然的發育を一定の方向に増長せしめる具案的仕事で、文化の傳授を方便とし、價値の創造を目的とするものであるといふのである。看給へ這の定義の中には、種々の因子が含まれて居やう。試に分析するに (一) 個人的發達 (二) 社會的文化の傳授 (三) 新文化の創造 (四) 他人教授並に (五) 自己教授である。即ち假に教育を三段にするにしたらば、下段は個人的發達に社會的文化の傳授を兼ねて、而かも自學とは謂ひながら他人教授を主とし、中段は又同じく個人的發達と社會的文化の傳授とを相兼ねるが、而かもその傳授文化の程度一層高く、分量も亦増進すべく、他人教授の中にも漸く自己教授の分子を加へ、終に最後の上段では次第々々に進んで、全く自己の研究工夫に由る新文化の創造に至つて、最高所に昇るものだ云ふ調ひたい。チャンセロール氏がカルチュアと謂つたのは或は教化よりも文化と見た方が好いかも知らぬが、併し同氏が只その傳授にのみ重きを置いたのは、面白くない。

三

但しチャンセロール氏にても亦その學校教育の本旨は、所謂新文化の創造でなくては駄目だとしてゐるところは、毫も自分と異ならず、却々痛快に論じてゐるから嬉しい。試にその一二節を

翻譯して見やう。曰はく社會の諸指導者は、又教育并に教化の中に一層の進歩の希望を認めるものである。たゞへ學校事が主として今現存する儘に社會を保存して行くことを目的とし、教化が主として既に成就した知識や熟練を此の世界の中に生かして残して行くことを目的とするにしても、尙ほそれに附け加へて吾人は學校事から今も後にも時々從來未曾で爲されなかつた事を爲すべき一個優秀の人物を期待するのである。而して人種の睿智即ち人類の内面的良心は未來永劫最も必要なものは新しい考であり、將來に乗込む鐵道の線路であることを承知してゐる筈だ。新思想や新人は初めて見た時は、如何程多く罵詈雑言されやうとも、將又それは恐らく今後の一代或は一世紀を通じて、さうであらうとも、然かも種族は少くも記憶の裡で明に、勇者的新思想并に之れを提言し贊助した勇者の人物を崇拜するに違ひない。然り而して學校事は此の新思想の爲に、それが如實に自餘一切の思想の先頭に立つことを可能たらしめやう。即ち學校事は追々老朽し行く過去時代の既に忘却されつゝある思想や、打捨てられつゝある方途を、いつ迄も執拗に進歩視することから、吾人を救済するものである。凡そ背後の線路の上には何等の進歩はない。將來への途を發見せんして過去を尋ねて見ても、何物があらうぞ。過去が吾人

の爲に爲し能ふ最上の事は、今迄にしない事は何か云ふことを示す外あるまい。蓋し將來に對しては何等忘却された途はない筈で、生物的にもせよ社會的にもせよアタヴィズム（隔世遺傳）ミカレシヂイヴィズム（再犯）ミカ謂ふ様な死んだ事物の復活は、常に偵察して攻撃すべきものである。換言すれば、種族は曾て一時は或る確定されたる方法で以て或る事を爲したが、而かも今は早くそれを抛棄し去つたのだ云ふことを示せ。凡そ一定した道途は、過去の墓地の方に引き入れるものだ云ふことは推量ではあるが、實は確實な事である。ロウエル氏が云つた様に

"Time makes ancient good uncouth;

We must upward still and onward

Who would keep abreast of Truth.

Lo, before us gleams her campfires!

We ourselves must Pilgrims be,

Nor attempts the Future's portals

With the Past's blood-rusted key."

時間は昔の良いものをも見苦しくする
吾儕は常に上に向き前に進むことを要する
真理の側の先頭にあることを望む者は

嗚呼吾儕の前にその篝火は閃けるぞ

吾儕は自ら巡禮者たらねばならぬ

又對來の門戸を叩いてはならぬ

過去の血で錆びた鎗で以て

想ふに此の事は普遍的に眞理ではないかも知らぬ。彼處にも此處にも澤山除外例はある筈だ。然かもこれは確に退嬰保守に對する堅實の忠告であり頂門の一針で、復漫に温故知新を口實にすることを許すまい。

勿論チャンセロル氏の意見は飽迄も穩健である。それは夫のボルセヴィキーの叫びたる過去を葬れといふには賛成しない。寧ろブライス卿がその名著「米國の共和政治」の中に、吾人は到

底過去を根絶する能はず云はれたのに、幾分の賛意を表してゐるらしい。併しさりきて世間若し過激派に對して悉く偏見を持つる人があつたらば、それは間違つた報告の爲に惑はされたのかも知れない云ひ、即ち今後適當の教育は、又眞の倫理學と同様に、先づ一切の事物を證明し而してその中で善なるものを把持せよと教しへる云つてゐるの公平である。特に新に創造する云つても、非常の人物や特別の場合の外は、既に從來一つの特別の線路に由つて爲された事を習ひ覺えた人は、その他の然らざる何人よりも、一新貢獻を爲すには一層可能性が多い云つてゐるのは、實際上至極有理な意見である。

斯くして同氏は飽迄も教育を社會的に見て行かうとするのである。然かもそれは又返すくも各個人銘々に自身の修養發達に勤しむと衝突はしない。吾儕は一種族として勇士殉國者を崇拜する。然かもそれと共に青年には自尊を獎勵したい。無智の惰弱な者が身を殺して見たところで、種族の上には何の益もない。危急存亡眞に一大事變に際して、身を殺して仁を爲す云ふとは、只賢明にして而かも強勇なる者の上のみ望まれるのである。されば結局は社會の爲は云へ、各個人が長く教育の過程を追うて勉強するの動機は、自己改良であるを看て、毫

も差支ないに斷言してゐる。所謂自己改良は固より根本は主我性であるにしても、その上に智的先見の明を加へたものであつて、而して既に先見の明あり、これに由つて徐に思慮するに
なれば、必ずや一層大なる我を懐持することは違ふまい。將又此の一層大なる我を懐持するに
由つて、彼自身の目的を達するに一層有効に成り、他人より一層一般的に且つ一層高尚に尊敬
せられる様に成ることも疑ひない。この先見の明は學校教育を受くる間に確に増進する。勿論
從來は學校に於ても多くの場合は、只壓抑せられ服従を強制せられるので、訓練に服従して
る様であるが、然かも時としてはその初は主我的なりしものが、終には主我性を全失して、他
の爲に盡くさんとするに至り、それはたゞ今現在に於て稱賛せられなくても、或は後世に於
て、或は來世に於て、屹度稱賛を博する様に成らう。何にしても最初から只徒に他人の爲ばかり
言つてゐては駄目である。先づ目前には自分自身の性格知識並に熟練の事を深く考慮し、自
分自身を一層好くすることに於て鍛練を怠つたつてはならぬ。此に於て個人即社會・社會即個
人・一而不二に成ることも云へやういふのは、至極同論で、例へば自分が漫に乃木主義なきを鼓
吹するものを喜はないのも其處にある。諸所謂自己改良では、先づ健康體力并に身體全體并に

各部分の熟練に於て大に勉めるところがなければならぬ。蓋し鍛練の効で以て、父祖遺傳の
約束の上に、何程の變化を生ずべきかは、學問上の未決の問題だとしても、一定の範圍内に於
て、その強健と熟練とを増すことは疑はない。然り而して社會は又成るべく長く學校に在るこ
とを獎勵するのは、それは社會の由つて成立する生活の體系・相互の從屬・一人と全體との從
屬をば十分理解する男女を必要とするからである。それは猶ほ競技にも嚴重に規則を守らねば
行かない様のものである。勿論世間には又随分己獨り勝手にするに云ふ男子もあり、自分獨り
快樂を縱にするに云ふ婦人もあらう。それは孰れも所謂理論上の野蠻人で、社會の安寧を攪拌
し罪科を成るとを免れまい。即ちそれを防ぐのが學校教育の一つの任務である。但し吳々も新
思想新人物の必要は承認することに忘れず、否學校が萬能者として青年に一切の知識を授ける
ものだなきと思つてはならない。第一青年の理解力の範圍外にある事物は如何にしても教しへ
様があるまい。それは固より徐に後年自ら經驗するべきものであらう。徒に構成的
想像に訴へて、彼此色々豫見せしめるのなきも感心しない。

さて又實際今日のまゝでは、長く學校にあつて高等の教育を受けるものは、僅に上流の餘裕ある階級に限られてゐる。それで之れを呪ふ聲が漸く高い。蓋し彼等は確に寄生蟲的生活を營む者に違はない。すべて社會には二種の寄生的階級がある。その一は最上端にあつて富裕の者であり、不勞所得に安逸を貪り、他は最下端にあつて極貧な者で、これは常に公の厄介となつてゐる。さて此の二つの者の中で孰が社會の進歩に貢献するか、將又双方共に貢献せぬかとは學者間では從來不斷に議論されてゐるころである。想ふに最下等の貧民の存在も亦消極的には、社會の進歩に貢献しないとは云へなからう。何となればその爲に大憐憫の心が催されて、四圍の悲惨なる境遇を排除するに一大刺戟を與へるからである。然かも富裕者の方は之れとは異なり、積極的であるに云へるのは、彼等は現在では數年數十年或は數百年、他の一般の者より先に進んで居るもので、常に奢侈の新方面を愈々開拓して止まないが、今日の奢侈は他日やがて一般の日常の必需品を改良し之れを増加し之れを廉價にして、以て人生々活を層一層安易にし愉快ならしめることは明なからである。それは或る意味に於ては新思想にも匹敵する見られんこともないからである。これは夫の少數富者の奢侈は多數の者に職業を與へるから好い

なき云ふ、有りふれたものよりは固より一層進んだ議論であらう。蓋し此處にも社會と個人との即一的關係があるに云へる。

總じて人は到底その天賦の稟性に於て平等たることは望まれない。平等は只機會の均當の上存しやう。斯くして當然に學校に種類があり段階もある。只有爲の者にして資力乏しきものには、別に之れを助成する途が開かれなければならぬ。斯くて學校の全長は二十年から二十四年にも及ぶ様で、古人が早く三十而立に云つたのも、大體は當つてゐる様だ。チャンセロル氏案は左の通りで、參考の爲に一寸載せやう。而してそれは各階級最大限度を示したものだに云つてゐる。數字は年數である。

ポストグラデュエート	六年	ブライマリ、スクール	五
コース井に専門科	四	幼稚園	二
カレッジ	四		
ハイスクール井にアカデミー	五	計	二〇一二四
エレメンタリスクール井に補習學校	四		

米國邊では學校の種類は實際年々に多くなる趨勢である。それは畢竟自ら好み又兩親の欲する

様な教育を授けやうとするからである。千篇一律は悪い。而してそれは固より概ね私立である様だが、併し米國でも本筋は矢張り政府が租税を以て維持し、直接或は間接に政府の手續に由つて選定した人物に由つて管理せられる共通公立學校並に大學制であつて、而してその特色は實に無料教育を本則とするところにあるらしい。否近頃は戦後の獨逸なごでも亦、頻に學校一元制といふを唱へて追々實施に向つてゐる様だが、略これに似たものである。吾が國の現行學制は早く劃一的たる丈け、それに近いことも謂へやうが、惜しい哉未だ無料云ふ所に至らず。小學校は元則としては夙に無謝儀ながら、實際は尙ほ多少の授業料を徵集するところ稀有さしない。従つて目下現に義務教育國庫補助問題の喧しいことなきを思ふに、愈なさけなくならざるを得ない。況してその義務年限の他の文明先進國に比して遙に短いことを知らば、何ぞ言つて好いやら。英國のフイツシャ氏の新法では、十八歳迄も義務は延長することである。たゞへそれは戦後財政の逼迫で、一寸急施に沮むところもあるにしても、無論早晚斷行するに極つてゐるやう。

聞くが如くんば、英國本年度(一九二二年)の豫算に於て、教育費國庫支出金は五千三百萬磅

に上り、それは通常行政費の約十分一で、陸軍でも亦六千二百萬磅、海軍又六千四百萬磅位に止まるけな。若夫れ佛國の如きは一般行政費の約五分の一、獨逸の如きは約三分の一に當るに聞いては、一番大に考へなければなるまい。米國の隆盛は復喋々を待たぬ。試にセント、ルイス市だけで言つても、小學校兒童一人につき一箇年約百參拾八圓、中學校生徒は同約參百六圓餘、師範學校生徒は同じく約九百五拾六圓餘を費し、尙ほこの外に、身體薄弱兒童の爲には特別教育施設として一人當り四百八拾六圓餘、精神薄弱兒の爲には、同じく六百五拾貳圓餘をも支出してゐるこのことである。それは無論彼我生活を異にするから、強ち只金額のみで速斷する譯には行かないが、然かも又一概に物價の相違に歸して看過するとは許さない。蓋し鹹つて我が現狀を回顧すれば、中等教育の施設尙ほ太だ不足で、可憐の兒童をして徒に入學試験難を愁嘆せしめるなきは、實に國辱を謂つても妨あるまい。

これも最近歸朝者の調査報告であるが、獨逸普魯西では人口約九十五名毎に中等教育を受くる者一人、英國では約百十名に一人、而して北米合衆國では數年前早く約七十三名に一人の割合であるのに、我が國では約百七十名に一人ぢやけな。彼此相距る何ぞ甚しきと謂はう。英國

では數年來國庫の補助を受けてゐる中學校に對しては、入學生の二十五パーセントだけは小學校より來る生徒に與へ、且つ無月謝で教育してゐるが、斯くして現に同國中學生の約四分一はスコラシップを受けてゐる割である。否是れは獨り英國に止まらず、戰敗國の普魯西でさへも亦父兄の年收二萬馬克以下の子弟には、無月謝とし、教科書を貸與し、學用品を給付し、剩へ生活費の補助をさへして遣り、一箇年生徒一人約一萬馬克を要するに拘らず、二百名は現にその通り給養して居り、而して此等の生徒はやがて大學に進入した後も、又無論公費で補助するのださうな。

蓋し此の如きは固より國運恢復に力むるにも由らうが、それはそれとして、今日は到處デモクラシーの本義上、教育の普及且つ向上を急務としてゐることを察知するに餘あらう。我が國の未だ遠く彼に及ばないのは、固より一つは國庫貧乏の爲からも來てゐたらうが、併しそれよりも寧ろデモクラシーの眞諦未だ十分に徹了しないに職由するを謂ふべきではなからうか。夫の民をして由らしむべし知らしむべからずの古流は、今尙ほ暗々裡に頑冥固陋輩の頭腦を支配して居り、徒に外來思想を危惧し、一切新事物を猜疑するの愚は話にならぬ。畏くも明治大帝

は維新の當初御誓文中に於て、逸早く廣く知識を世界に求め、舊來の陋習を一洗せんを仰せられてゐるではないか。蓋し知識の乏しいデモクラシーは往々危險を醸す様で、デモクラシーの安全は全く民衆一般の知識に待つことは、定論動かし難いものであるを斷言する。

五

更に他の方面より論評して看るに、我が國では國庫の補助は右の通り不行届なるにも拘らず國家の権能は尙ほ頗る高大で、些細の事項に迄も干涉し、繁縛を極めてゐることは、識者にはをかしい様である。英國なきは素より然らず、萬事自由意志に出づる努力を催進することを旨としゐることは、羨慕に堪へないが、米國なるは一層自由で、右様經費補助に由る關係の外は、何者にも左右せられず、將來は教育は全然獨立の制度たらしめやうとし、それには各州に州教育局を置き、而かもその職員は州長官その他の官吏の選任は全然無關係たらしめるが好からうこの説である。吾が國でも又往年一部の人士中には、教育の事は擧げて、宮内省に直隸させたらばさうかこの意見があつた様で、自分共は竊に反對したが、彼此比較するに、實に雲泥霄壤よりも尙ほ隔つてゐるを謂はう。

米國で學校と教會との比較は如何と尋ねて見るに、それは今尙ほ學校の方が獨立的たる所も又成全的たる所も少いが、然かも普遍的たる所は遙に多い様に見受ける。それは就學は強制せられるけれども、教會に行くに行かざるは、全く任意的であるからでもあらう。特に今度の世界大戰は普遍的擴大的教育の必要を恐ろしく高調する様に成りつゝあり、兵卒として應募合格者の百分の二十六は無筆で、家からの手紙も十分讀めず、まして手紙を書くことはむづかしく、不合格者は尙ほ甚しかつたさうな。之れに反して獨逸では千九百十二年の新兵には、文盲者百分の〇・五で、英國では千九百三年頃は、新兵中僅に百分の一、〇に止つたに聞くと、米國も固よりちつとしてはゐらたのだらう。我が國全國壯丁検査の成績は、大正拾年度では受験壯丁の百分の二・五は不就學者であり、百分の一・三、一は小學校中途退學者であり、而して讀書算術を爲し得ざる者は百分の一・〇四となつてゐる。米國には數年前の事ではあるが、學校教師の數約六十萬人、一ヶ年の教育經費六億弗を要するに對して、宗教々師の數は約十一萬人、宗教經費は一億弗に過ぎなかつたことも聞いたことがある。今日は同國の如き國柄にても、風教の本源は寧ろ學校にあることは争えまい。諺に「金庫のある所心臓もある」に。知らず

吾が國の現状如何。學校教師の數は大學より小學校迄を通算して約二十萬を有す。而して佛教諸宗派教師も亦約五十萬に及ぶと云はる。然かもそれは只數の上のみ。經費の如きは復言ふを須るない程なのは、氣毒と謂はうか。

但し更に自分をして露骨に言はするに、我が國從來の教育の遣り方の様ならば、たゞへ此の實際義務教育年限を延長しても、害こそあれ利はあるまいか、竊に懸念に堪へない。況して既成宗教々團の陳腐の教訓なき尙更の事であらう。夫のパートナーランド、ラッセル氏は早く『社會改造の原理』中に於て、兒童教育上その自然の成長を阻害するものは、權威の濫用で、而して教科目としては宗教と歴史だと言つてゐる。我が國の學校教育には素より宗教はないが、その代に倫理道德の修身科といふものがあつて、然かも佛蘭西一流の道德教育公民教育は自らその趣を異にし、所謂國民道德なるものを高調し、國史料と相待つて、民衆現在並に將來の實生活は全然没交渉の時代錯誤的注入教育を施して得々たるのは片腹痛い。畏くも教育勅語は炳焉として永く國民教育の指針と仰がれるだらうけれども、其處には幾多の大小公私の徳目に就いて、實は一々細かに實行方法なきを、具體的に告示しにはなつてゐないを、難有く思は

なければならぬ。言ふ迄もなく國體の尊嚴なる所以は、早くから十分兒童に會得させて置くが好からうが、併しそれと共に毎々申す通り、將來は層一層デモクラチックに成り行くことに、屹度留意しなければなるまい。例へば民衆的勞働國家に成ることは、昔の貴族的有産階級的軍國的時代の國家とは、自ら萬事遣り口が違つて行かなければならず、實に倫理道德に於ても亦自ら根本的改革を必要とする様になるだらう。隣邦支那に於て夙に排孔孟論の唱へられてゐるなごも、好かれ悪かれ參考の値はないごしまい。何はごもあれ舊來の漢學流や國學流は此の際その儘では通過することは難い様だ。

此の點に於て例のアントン、メンガーは又道に一見識あり。曰はく從來一國民を截然に上下の二階級に分斷してゐた所以は、二つの因子がある。即ち教育と財産とである。従つて財産制を適宜調節することは、既に多數識者の類に意を用ひてゐるところであるが、教育を普及向上させてそれで以て、知識を成るべく均分することは、動もすれば輕視されてゐるの貌がある。これは大なる過誤で、教育の偏重が民衆社會に危険なことは、敢て財産の不均一に譲らなからう。勿論今後の文明社會に於ては、學者・技術家・醫師・法律家等の諸専門家は固より益々必要

で、我儕は復決して昔日一部の社會主義者が高唱した様に、萬事禁欲者流の簡易生活で以て満足すべきではない。従つて高等教育の向上は愈々大切であるが、併し機會はご迄も均當であり、知識は成るだけ普及させなければならぬ。即ち斯くして始めて國民一同眞に精神的平等の基礎の上に立つて、平等的に交通することが出来る譯で、それには第一從來傳統的に存續して來た不必要又は有害な諸元素を排除し、而して第二には斯く一般的に簡潔にせられた材料を、更に成るべく有益に學習する様に、方法や設備を改正し擴張することである。委しく云へば先づ宗教々育を全然分離し、尙ほその上に希臘羅馬の古代文化の研究を悉く削除しやうご云ふのである。即ち民衆勞働國家では現代語と現代文學を以て古典教育に置き換へ、古典教育はすべて専門の方に廻して仕舞へごいふのである。想ふに我が國に於ても亦將來は漢字なごも普通教育からは全廢せられる様にならう。而して教育の本義は人生實生活に即するを旨とし、他律的教授訓練よりも自學自習を肝要とする様になつて、其處には學校教育の根本的改革を生ずるだらう。詳細は新著「教育學大全」(同文館)中に述べて置いた。

それ然り、最近歐米諸國では、補習教育は勿論、一層廣大なる意義に於て大人教育に關する施設が、日に日に新に成り行きつゝあるらしい。而してそれは固より實に何か職業を授けて糊口に資せしめんが爲ではなく、寧ろ人生そのもの、興趣に於てせんごするから難有いではないか。尤も其處にはプロレツトカルトなる新名辭が流行し出し、それはプロレタリアン、カルチユア即ち無産階級文化の意味で、甚しきは労働者の開發向上を急ぎ、由つて以て、社會組織の根本的改正を速成せんごし、教育いふよりも寧ろ宣傳に汲々たるものもある様だが、それはそれごして、一般に穩健なる教育普及向上事業が愈々盛になり行くのはめでたい。勿論其淵源は已にかなり久しい様で、暫く英國に就いて言ふも、今日W・E・A即ち労働者教育協會の成立を見る迄には、色々沿革がある。ドツプス氏の記述に據るご、ロバート・オーウエンやゼームス・ミルなきの論辯はそれごして、千八百五十年が最初の出立點ごすべきらしい。それは此の頃から國庫補助が早く問題に成つたからである。而して千八百七十年には一面には初等教育並に技藝教育の市町制度の發達ご共に、一面には公立圖書館が續々擴張せられ、又大人の夜學に出席するもの愈々増加するのを見た。それが長足の進歩を爲して、千八百十九年並に千九百二

年の法令は、早く實に大人教育の勅許狀たる觀がある。否之れより先き既に大學擴張運動あり労働會議の經營するものあり、又産業組合會の事業ごするものもあつて、追々盛大に赴きつゝ、はあつたが、此に於て忽然一大飛躍を試み、翌千九百三年には早く右の協會が始めて組織されたのである。而して千九百七年以後は婦人の教育上にも特別に注意し、又千九百十年以後は田舎地方に於ける事業の發達も計劃し出したさうな。尙ほ之れを外にしては、ラスキン大學ありこれは千九百十年後は全然労働組合の直接監督の下に置かれる様になつたが、その前年には早く前述極端派の手で組織されて労働大學があり、將又同年にセリオークに於て大人植民學校成り、やがて擴張して一個の産業組合大學に昇格しやうごしてゐるらしい。此等の事も既に前掲の拙著『教育學大全』の中には相應に詳録して置いた積りだが、最近歸朝の澤柳・小西兩博士一行の視察談も、亦これに重きを置いてゐる様に見受ける。而して自分はそれご共に特にバーレー氏の『ケンブリッジ大學大人教育論集』(一九二〇年)を一讀せんごを進める。

因に丁抹庶民高等學校の近況を調べて見るご、抑々此の種の學校が始めて其處に生れたのは千八百四十四年ごいふから、早八十年の昔ごなつた。それはグラントウィツクごいふ一人の僧

正の熱心工夫したものである。尤も最初二十年間は、格別現著な進歩も見なかつた様だが、偶々獨逸と交戦して敗れ、割地の不面目を負はされてからは、國民一同に非常に憤慨して、何でも教育の力で以て、國運の挽回を圖らうと臍を固め、先づ主として此の種の學校を普及するの策を立て、戦前既に八十校の多きに上つた様で、詳言するに庶民高等學校五十八校、農業或は園藝を主とするもの二十一校、學生通計約九千人を算する由、千九百十九年の統計で見た。これは一種の私立補習學校たるに相違ないが、組織は極めて簡單で、入學年齢なども嚴重に限せず、大抵十八歳乃至二十五歳位で、それは何事も全然自由である様だが、男女兩組を別ち通例男子は冬期五ヶ月、女子には夏期三ヶ月間開校してゐるらしい。尤も補習學校を謂つても固より單に職業的技藝的教育を施すものではなく、却て文化の催進向上を旨としてゐることは國語、國史、世界歴史、法制、地理、物理及衛生、數學、自然科學、書方、圖畫といふ風の課程が教しへられてゐるのでも分からう。是れは主として農民の智識開發の爲にしたと謂へるがそれが今日に於て直接間接に歐洲諸大都市の勞働者教育に典型を示した効は、頗る偉大だと思はれてゐる。而して今や更に一步を進めて、此等民衆大學運動を汎く國際的たらしめやうとし

て、丁抹のヘリシゲル市を中心とし、八ヶ國民を代表する二十三人の學生が集會したと聞いた。想ふに斯んな事からして、追々國際平和の教育的基礎も据えられることであらう。古風な愛國狂的尙武教育は固より早、一掃されなければなるまいと考へる。

學問界の前途

一

今日は普通一般には科學萬能の世と謂へやう。曩にオーギュスト・コントが人智の進歩を三段に分ち、最初は神學の時代より、中頃は形而上學の時代となり、而して最後は科學の時代と成り行くに云つたのは、實に前世紀に於ける思想の趨勢を示して餘りありと見られる。抑々科學とは素サイヤンスの譯稱で、原語は拉丁語のシエンチアに出て、その元はシーレなる動詞に歸するところは喋々を待つまい。シーレは英語のツ、ノウで、即ち知るといふことである。然かもそれを以て夫の『大學』にある格物致知と容易く同一視されては困る。同じ知るにしても科學で知るの、その知り方が全然特別で、科學の科學たるところは、一に其の方法にあるこ

云へる。即ち苟くも眞正の科學としては、その取扱ふところの事物を性質的に分析し、分量的に測量し、數學的に計算し、統計的に記述しなければならぬ。定性的分析は、當該事物の別々の部分或は形貌を發見することである。例へばこれを卑近に言へば、虹霓の色彩や、牛乳の化學的成分に就いて、知らんことを如くである。定量的測量は、是等の諸部分の數量或は重量を知り、或は諸性質の相對的勢力を見んことをするのである。例へば虹霓に於ける七原色の割合如何か、牛乳に於ける乳脂・酪素・乳糖・礦物並に水分の比例如何云ふが如きものである。數學的計算は、それを一々精密に計算すること、例へば牛乳の乳脂は百分の一・三・七といふが如し。而して統計的記述を以て、是等の科學的過程は始めて完成せられる譯で、それは固より只一事一物を一定の時間一定の場所に於て、極めて少しばかり計數するのではなく、廣く種々の場合に於て、丁寧に觀察し、精確に計算して、而してその結果を數字を以て記録すべきものである。

夫れ然り、科學は實に萬人に畏敬せられる筈で、淨玻璃よりも尙ほ明かであり、毫も欺くことが出来ないものだとする。科學者は眞理の外には何もかも顧慮するところはなく、眞理は誠

に是れ科學者の上帝と謂へやう。眞理は取りも直さず事實である。論より證據で、事實さへ發見されたならば、無用の論争は自ら閉息して仕舞ふに極つてゐるやう。斯く事實で以て勝敗は直ぐに極つて仕舞ふことを、科學者に取つて最神聖なものは只事實で、科學者は實に事實なる宗教を信奉する者と謂へる。科學者の事實を求尋することは、實業家の金錢を渴望するに優ることも劣ることもあるまい。

斯くて今日世界中で、科學の最盛なる所は何處か尋ねると、それはチャンセロール、に言はせるに、亞米利加合衆國をば第一に推すべしだとする。實に米國はさう觀ても藝術の土地だとは謂へない。然かも科學では遂に他を凌駕してゐるらしい。特に經濟學や社會關係の諸科學では、それは確に非常の進歩を爲してゐる。米國の大學と英國の大學とは雲泥霄壤の差を謂つて妨あるまい。然り米國では社會上の一事一物科學の手を觸れざるものは絶無だ云へる。乃ち紳士の交際には今日は何事も空論は措いて、先づ統計を擧げる様に成りつゝある様だ。例へば自動車は果して有害物であらうか云ふ問題があるとするに、それは一方には年々歳々自動車の爲に費す金額を計算し、而して一方には又毎年自動車の爲に殺傷の害を被る者の數如何を知

つて、後に言ふ外あるまいとする。將又宗教は果して衰微しつゝあるか云へば、それには目下一ケ年に海外布教の爲に投ずる金額、教會員の實數、教會に掲籍の者にして監獄や懲治場に在るもの、實數等を知るが先務であらう。政治が失敗か否かは、例へば一ケ年に何人の殺人罪があるか、犯罪の總數は如何、關稅の收入如何、その徵稅費は如何、貧民は次第々々にその面目を一新しつゝあるか、目下の勞銀は如何、而して又それは購買力上舊時に比して優劣如何といふ事なきを調べた上で、始めて答へられるとする。米國人は果して讀書好きの人民と謂へるか否か。それは一ケ年一人毎に幾部の書籍が購讀されるかを見なければ何とも云へまい。戰時一人を殺すには幾拾萬圓を要するか、それが精確に分かつて始めて軍備縮少の急務も愈々明になる。それは猶ほ一人に骨壞疽があるかないかは、X光線に照しその寫眞を十分研究した上でなくては斷言し難い様なものだ。苟くも事實をさへ知つてゐたらば、決して邪道へ踏み込まない云ふのが、科學者の常に誇言するところである。

従つて科學は如何なる場處にも進入せんことを試みて、毫も遠慮しない。何物でも臆面もなく侵襲しやうと、力んでゐる。例へば舊來の結婚制は今果して失敗に歸しつゝあるか如何といふ

が如き問題にも、早く着手して怠らず。一ケ年に離婚の數は如何、結婚は漸く延期せらるゝ傾あるや如何、年々男女の正式結婚以外に、一所に成る數如何、乃至其の生兒に於ける不具或は死産の比例如何。凡そ此等一切の關係事項を精密に調査して、始めて眞理は發見されやうと看てゐる。否聖書の上にも固より一々嚴正なる批判を加へんとして止まず。其處に所謂高等批評が盛に行はれて居り、例へば希臘の原文に云々云々言ふ者があること、基督が果して希臘語を知つてゐたかを衝き込んで來る。更に一步を進めては科學者は、吾儕一個人が日々その身體生活上に發生する物理的エネルギーの總額をば、カロリーを以て精密に測定し、之れに由つて飲食物の適否を明にし、本人の競争場裡に於ける成功如何を豫言して違はない程に成つてゐる。其處には早く人はその食ふ物であることいふ諺もある様で、又最近には人は健康を歡喜を放射することも云はれてゐる様だ。乃ち人間の生物測定が愈々發達し、各個人の視力・聽力・回想力・反動力・辨識力・判斷力并にその時間的比率を仔細に測定することが出来れば、豫めその人の器量は明言して過たないこと云はれてゐる。現に今度の世界大戰中には、米國では斯の心理的テストで兵卒を選択して、適不適を定め、尙且つ戰後の今日は之れを廣く應用して、

諸學校の入學試験に代へんとしてゐるとは周知であらう。これはソルンダイク氏等の率先唱導したところであるが、之れを關聯して其處には又早く能率催進の爲に、所謂科學的管理法の工夫し實施せらるゝあり、更に新に人間工學なる新學術さへ起り來つて、萬事愈々機械化し去りつゝあり、科學の侵入は到底防遏に由なく、彼等は終には美術そのものをも遠慮なく分析解剖する處を能くするに高言してゐる程である。

二

斯様に科學者が奮勉努力して休止せざる動機は何ぞ云はゞ、只好奇心求知心の外はない様で、彼等の胸裡には常に一燈を手にして闇黒裡に進入せんとするの情が熾えてゐる。彼等の最惡むところは生物識りの山師輩である。無智は敢て咎めない。蓋し無智なる所に彼等が着手の機會はある譯で、何か一つの空虚さへあらば、彼等は努めてそれを充滿させやうとするから頼母しい。彼等の敵は似而非科學で、それは須らく法令を以て禁遏すべきものだに迄主張するのである。換言すれば迷信破却は彼等の熱心に絶叫するところである。往年山川健次郎男外一二の理學者が、福來博士一派の念射實驗に向つて、大々の打撃を加へたのは、その事實を捏造し

て、半可通の説明を下す詐僞的行爲に似たところを摘發せんしたもので、然かも最初の動機は只斯かる事實の有無を明にせんとするに過ぎなかつたに、堂々聲言したところは追に雄々しいと謂はなければなるまい。勿論今日の科學はこれを昔日のものに較べるに、層一層特殊化し専門化して行く様で、局面は愈々狭くなることは免れないが、然かも造詣は愈々深く這入つて止むところを知らない云へやう。これは現に醫學の上に於て最顯著であり、眞に専門家なるに、只極めて限られた部分をのみ最精しく知つてゐるに過ぎない云ふ有様で、外科が分かれて眼科・耳鼻咽喉科等を派生したばかりでなく、例へばオイスタキ氏管異常の専門といふ様な者も終に出て來さうである。而して彼等は今は専ら類症鑑別に苦心焦慮し、既に診定したはらば又手術家は解剖圖に照して切開截除に力め、病める局所にのみ注目して、人間そのものは殆ど眼中に置かない貌である。これには實際上多少の弊はあるが、その歸趣は一言以て之れを掩はゞ、只次第々に自然を征服して前進しやう云ふのに外ない様である。

夫れ然り、科學者は眞理を求むるに急にして、他を顧慮するに暇なく勢頗る主我的になるとを免れない様である。例へば先年米國で一旦無線電信が廣く行はれるに、一切の電信會社の株

は三分一の價に落ちて復取り戻すこと難く、終に大損失を醸したさうなが、それは致方あるまい。科學が進み機械が進むに、人間は漸く失職する者が多く成り、生計に窮して爲に發狂する者も往々あつたさうしても、彼等は一向無頓着である。併し他の一方では又不老不死の方法も漸く講ぜらるゝ様で、メチニコフもスタイナツハも、共にまだ甘く行かない様ではあるが、彼等は固より決して自暴自棄はしなからう。而して其處に又早く人口過剰の問題があるから面倒に成るが、科學はそんな事は知らぬ顔をしてゐる。新マルサス論などは或は之れに對する一つの科學的救濟法だらうかも知れない。將又科學の進歩は一面に於て花柳病の不治を治し、一面には避妊を容易ならしめ、更に無痛分娩法の發明あり、剩へ母性保護の行届く様になること共に彼は相待つて男女性的關係の道德を一變しつゝあるが如きことも、科學者は格別問題にしては居ないらしい。

斯様に科學萬能であるところから、科學は實に現代社會の寵兒で、大會社は皆科學者を聘用し、技師を優遇するとに於て毫も吝ならず。聞く所では露西亞のレニン政府でも、獨り科學者や技師は非常に尊重されてゐるさうな。従つて内外各國到處科學を教授する學校は、純正でも

應用でも共に最隆盛な様だ。化學と數學とはオックスフォード大學は勿論、イートンの様な古風な高等學校でさへも、近頃は格別に重きを置いて、化學實驗室の頗る立派なものがあるのを見た。これは一つはロスコーなどの先唱に啓發されたところもあらう。各國政府科學の研究には多大の經費を支出することを厭はざる様で、吾が國の如きは尙ほ未だし云はれやう。帝國學士院の學術研究補助は過去二年度を通觀するに、文理孰に偏してゐないか、併し理學の方が多少勝つてゐる。理化學研究所は資金八百萬圓に上り、他の啓明會などが僅々百萬圓の資本を以て、文理双方の事項の研究を助成することは、同一の談ではないが、まだ足りない感じがする。ロックフコラーの研究所の如きは、羨慕に堪へない。

三

之れを要するに、科學の隆盛は固より大に喜ぶべきであるが、然かも亦その道德並に宗教上に及ぼす影響如何は、別に一考を須ひなければなるまいといふ議論もある様だ。先づ道德の方面から言つて見やう。それは確に或る種類の徳性は發揮することを資けるに極つてゐる。此の事は早く千八百九十年代の初頃に於て『ポピュラール・サイエンス、モンスリー』誌上の一論文に

由つて闡明せられ、當時自分は頻にヘルバルト派の教育學を鼓吹し、教育の目的は徳性の涵養に在ることを高調してゐたが、元來同派に於ては歴史的情操材料を主とするに由り、自ら科學者側の反對を招く虞あり、それを慰和して同意せしめんが爲に、幸に利用したこともあつた。只今手許に同雜誌がないのでその名を擧ぐることは出来ないのは惜しいが、致方なからう。ミにかく科學は忍耐・誠實・謙遜・沈黙・正直・體面・自己没却・勤勉・剛毅并に公明等の諸美德を培養する効果の顯著なことは争えなからう。或は科學は自ら尊大に構へて而して他を罵詈する悪い癖を増長させる傾があるなことを云ふものがある。併しこれは特に獨逸學者に對する非難の様であつて、而してそれは固より同國の科學上の諸業績が極めて偉大なのに由ることは争はないが、それでも亦實は該民族の氣質からで、獨逸人はたゞ科學上の功績なくとも、矢張り野郎自大の風は免れまいと云へるだらう。只科學は同情心といふが如きことには縁遠い様なのは争ひ難い。それは復必ずしも獨逸人の今度の大戰中に於ける猙獰殘忍の所業から立論するばかりではない。科學は個人的徳性は發揮しても、社會的徳性には十分貢獻するところは無い様だ。科學に由りて人々を相互に結合させることを云ふことは少い。將又科學は信仰を云ふこ

ミには根本的反對で、到底兩立し難い。従つて宗教ミは古來常に相争うてゐる。その消息の一斑は稍々古いところでは、ドラバーの『宗教ミ科學ミの衝突』(一八八七年)がある。それは早く邦譯も出來て一時弘く行はれた様だ。之れにつぎては又ホワイト氏の『基督教國に於ける科學ミ神學ミの戦闘の歴史』(一八九六年)なともある。最近米國では又反ダルウイン熱の昂つたのは頗るをかしい。

斯くて科學ミ宗教ミの争闘は何時息むべしとも想像するに難いが、併し今日世界思潮の大勢はコント一流の實證主義には憐焉たらず、否コント自身にも亦晩年には人道を旨とせる一種の宗教類似のものが唱道してゐたことは喋々を待たまい。此の現今の趨勢を哲學的に考へ、重なる諸大家の意見に徴したものにエミル・ブトリーの『現代哲學中に於ける科學ミ宗教』(一九〇〇年)がある。これは自分が再度の洋行土産に持歸り、逸早く紹介し批判をも加へて、京都帝國大學に於て被講し、後『現今諸大哲學者の宗教觀』と題して、拙著『大學講義全集』第三輯『宗教々育原論』(大正六年)の末に附録としてあるのを一讀して貰ひたい。又その全譯は赤松宇野兩學士の手になり『科學ミ宗教』の表題で、大正八年頃博文館から出版されてゐる。而してそ

れより先き既に英譯もある。何はこもあれ、今日の人心は復單に科學的たり機械的たる主智主義には満足しない。其處に早く哲學的の唯心主義が復興しつゝある様で、然かもそれさへ夫のヘーゲル一流の論理的辯證的主智主義には反旗を翻す者が彼處此處にある。此の事は少しく古く遡つて見るに、實はカントの批判主義中にも明に存してゐるもので、彼は純粹理性側に於て範疇並に條件を規定するに同時に、實際理性の側に於て自由を高唱し、乃至靈魂不滅をも承認してゐる。ヂュ・ボア・レイモンのイグノラビムスは、ヘツケルの『宇宙の謎』に於て、その得意の萬有一元論よりした手殿しい批判はあるが、人間はそれで徹底せず、吾が國に於ては現に富士川博士の如きは、這の一元論を基礎として、其處に淨土教の信仰を建てやうと企てゝゐるらしい。その當否に成否は暫く措いて言はないが、ヘツケルの議論丈けで以て果して人心を永く満足せしめ得るかさうかは、一大疑問であらう。否スペンサーは又その『哲學原理』に於て早く不可知なるものを立てゝゐるに共に、其處に宗教的信仰の成立すべき餘地を許與して居るのにも注意しなければなるまい。然り而して一步を進めてシヨツペンハウエルあり、理念に對して意志を置き、彼を抑へて此を揚げ、主智主義に對して主意主義あり、ハルトマン之れを承

けて、意識に對して無意識を言ひ、更に主智主義反對の一新生面を開展した。これはやがて本能衝動の尊重も成り、延いてフロイド一流の新心理學の基をなしたとも云へやうが、それと共に生理的心理學の進歩も亦大に唯心的主智主義を打撃するところがあつたらう。蓋しそれは從來の認識論を一變すべきものと思はれるからである。斯くしてジェームスのプラグマチズムとなり、類に信ずる意志を高調するに共に、ベルグソンの本能的直觀を主張するに由つて科學の機械的世界觀を打破し、その制定主義を排除したことは頗る多きところがある。此の點に於て、手近に米人ミラー氏の『ベルグソンと宗教』(一九一六年)なる一冊子は、恰好の参考書と謂つて妨あるまい。尙ほ類似のものは多々あるが一々列挙しない。

四

然り而して此の際に於て又今度の大戦は敵も味方も不幸相重なり、人情自ら靈魂の如何に留意するに多き多く、マイヤース一流の靈智的研究愈々盛にして、今は一般に神祕的傾向を増加しつゝあることは、掩い難い事實である。其處に又藝術の勃興も相伴つて居る譯だに云へる。勿論藝術は主意的ではなく主情的ではあるが、然かも情意はこれの一つに併せ見て宜しからう。

カントの後に一方にフヒテあつて意志を重んじたるに同時に、他方にはシェリングがあつて感情を主としたことをも顧みなければならぬ。斯くして又其處に漸く價值論の注意を惹くあり、哲學者としてウインデルバント等あれば、心理學者としてミュンステルベルグ等亦大に主唱する所あり、終にリツカート氏出で、自然科学に對して文化科學を高調するに至つて、所謂科學の範圍制限は愈々明になつて來たこと云へる。否これは科學外よりせる反動であるが、實は科學内にも亦近時驚くべき變動のあることを知らなければならぬ。それは先づ第一に幾何學に於て一大革命が起つた様な次第で、古來不磨の眞理とせられたるユークリッドの幾何學は、不備なものだとして、新ユークリッド幾何學が漸く發達して來た。これは前世紀の初に於てガウス・ロバチエウスキー・ボリアイなどの平行の公理に關する新異見より起つた様で、リーマンやヘルムホルツの空間の概念に關する新カント派の論争に成り、その間にカリノン・レカラスの一般的幾何學なるものが生じて、ユークリッドのものは只その一部に過ぎないこと云ふに至つた。これは畢竟空間の先驗性如何に關することであるが、換言すれば矢張り又幾何學上に於ける概念と直覺との論争に外ならない。新カント派の驍將たるコーエンやナトルプ氏は頻に空間

三面性の事を先驗的に演繹せんことを力めて、而かも甘く行はず更に又實驗に徵證せんことを意見も出たのだが、星學上種々の研究を重ねて、スタロ・ボアンカレー・クチニラー等は之れを不可能とし、ラツセル氏は尙ほ可能にしてゐる。

更に詳に論ずること、是れは固より營に幾何學のみには止らない。早く前世紀の中頃より純正數學なるものを作出するに苦心する者がある。それは曾てライブニッツなどの考へてゐた様に論理と數理とを融合しやうと企てたもので、ベアノ・ピエリ・ホワイトヘッド等皆大に之れに盡力してゐるらしい。ラツセル氏はその上に百尺竿頭一步を進めた者と稱せられる。所謂新實在論は其處に起つたのである。此に至つて認識論は一新した譯だが、それは舊風の實際論とは自ら別で、所謂認識論上の一元論を取り、吾人の思想の外にある物も、吾人の意識に現れたる内容と相異なることを許さない所に特徴がある。然かも亦それには早くマイノングなどの反對もある。今茲には一々詳説しないが、終にアインシュタイン氏の相對原理論出で、目下天下を風靡しつゝある筋も、略ぼ之れで分からう。一言以て之れを掩はゞ、折角の科學の眞理一本鎗も斯様に認識如何の議論から調べて掛かること、一概に確拔とは謂へないかも知れぬ。

夫れ然りダルウインが晩年、詩や音楽を久しく放棄して學ばなかつたことを悔いたか、バ
 ストルがその愛兒を喪うて、宗教的信仰の必要を痛切に感じたか云ふ風の説話は、暫く措く
 ぎしても、科學萬能はさうも徹底し難い様だ。これ自分の夙に宗教の教育上に於ける必要を宣
 傳した所以で、而してその所謂宗教なるもの亦固より決して社會救済を云々するのみに止ま
 らない。只日新の科學と相容れざる似而非科學や何かの迷信は、判然排斥しなければなるまい
 右科學に對する反動の事は伊太利人アリオツタ教授の新著『科學に對する唯心的反動』（一九一
 二年）に詳説してある。而して幸に此の書は又英語に翻譯せられ改訂を加へて一九一四年に出
 版されてゐる様だ。因に右述べた如く今日科學的研究の最盛なのは米國で、或は獨逸に取つて
 代らんとしてゐる。蓋し同國民の教育の根本的精神は、清教徒の卒先設立した最古の大學、即
 ちハーヴァト大學の最初の宣言書に於て既に明言せられてゐるところで、教育は眞理に對する
 大膽な探求でなくてはならない。何となれば正直に宣言せらるゝ眞理は、生活をして一層善美
 ならしめ且つ一層充實せしめるからであること書いてあるさうな。これは實に千六百三十六年頃
 になされたもので、早三百年に垂々としてゐることを、驚嘆に堪へない。併しその實此の所

謂眞理が、果して今日の所謂科學的眞理と同一か否かは疑へば疑へやう。否それは恐らく清
 教徒自身の主張する宗教上の眞理が却て主要なものであつたのかも知れない。若しさう見るな
 らば、今日は太だ變なものに成つて仕舞つた譯だが、併し又最近は科學に靈的意義を與へ、科
 學の價値を信するは、やがて上帝を信するなり云ふ論法が行はれる様だとするならば、大に
 妙だとも謂へやう。本章を讀む者は此に注意して貰ひたい。自分は文化進歩の第一要件は、誰
 が何と言つても、自然の征服にあることを高調したい。科學の研究は益々盛にならなければな
 らぬ。而してそれと共に吾が國舊來の神道始め似而非宗教的諸迷信の、これを阻害するものあ
 らば、一日も早く退治せなければならぬ。然り而して這の自然の征服と共に、他の一面では社
 會の組織を改造して、科學進歩に由る利益を、獨り少數の資本家の壟斷するところに任さず。
 尙且つ更に一面には同情心を擴張して、科學の進歩を惡用して、戰禍を愈々大ならしめる様な
 弊害のない様にした。科學の進歩が文化生活の改善に資するならば、最結構だご申さう。

五

上來述べるところで、科學と哲學並に宗教との關係も、一通りは分かつたらうが、それにし

ても尙ほ學問界の前途を言ふ者は、さうしても又神祕主義を度外視する譯には行かないことを思はなければならぬ。仍つて自分は今茲に近稿「宗教と神祕主義並に暗示」なる一篇を附録しやう。曰はく抑々神祕主義即ちミステシズムといふことは、曾て中世紀に於ては歐洲を風靡し去つたこともある。否更に遡つて考へるに、實は西紀第三世紀に於て、早くネオ・プラトニツク哲學中に、獨特の風光を現はしてゐたところをも見やう。中世紀に於けるその最有力なる代表は誰ぞと曰はゞ、それはスコツス・エリゲナを初とし、エツクハルトに至つて一層深密に成つてゐる。蓋し一言以て之れを掩はゞ、神祕主義とは、凡そ神は何等尋常一般の知識過程では、到底正當に理解することは出来ない。それは只一個の直接的直觀に由る外ないもので、直接的直觀は固より知識を超越したものである。換言すればそれは狂歡的神通に由つて、神人合一を現するので、コンミュニオンと謂ふのもそれである。神人感應の義である。而して又それに基づいて、一個特別の世界觀を建設することが出来るとする。

勿論それは固より獨り西洋にのみに限るべきではなく、東洋にも亦昔から哲學や宗教の上には、相應に繁昌してゐることは敢て喋々を待つまゐ。夫の禪家の直指見性即身成佛も亦一個の

直接的直觀であると思はれるが、別して眞言密教の甚深なる觀法行法の上には、神祕主義の色彩は著く漂うてゐるを謂へる。その入我々入を望みとする如きは、所謂コンミュニオンにあらずして何ぞと曰ひたい。如實知自心も亦直接的直觀に外ないを觀たがさうぢや。

但し這の神祕主義は近世紀に入つてからは、次第々々に科學の爲に排除せられ、一時は僅に片隅を喰啣するに過ぎないといふ態であつたことも承認しなければなるまい。別して吾が國では兎角物事が極端に劃一に流れ易く、尙且つ包容力に乏しい爲に、單調に成りがちで、明治維新後科學のみ獨り政府筋の尊重するところとなり、宗教特にその神祕主義的方面は一途に迷信視せられ左道視せられ、徒に民衆を轟惑するものだとして排斥せられたことは實に氣の毒であつた。即ち其處には主智主義のみ獨り榮え、合理主義のみ専ら重んぜられ、乃至實理主義のみ幅を利かしてゐて、畏くも維新の初、天地神明に誓はせ給うた五ヶ條の中に、舊來の陋習を一洗し、ミ仰せられてあるのは、斯かる神祕主義なきを目標したものだとして、警察側の干涉なきは數々横暴を極めたことさへないことは云へなからう。

併し今は早已に天下の大勢は一變しつゝある。西洋諸國では既して前世紀の末期よりして、

意外にも神祕主義の挽回せらるゝところあるを、輕々看過する譯には行かなかつた。否それは或は神祕主義でなかつたかも知らぬ。然かも催眠術を謂ひ、心理療法を謂ひ、乃至無意識を謂ひ、潜在意識を謂ふもの、孰れも皆廣義の神祕ならざるはあるまい。一派の醫學者に言はせるに神祕主義は只是れ迷信である。催眠術はさうでない。催眠術が神祕主義の迷信から離断して、心理學上より研究せられ尙且つ醫療上に應用せられ出したのは、實に佛人アレキサンドル・ベルトラン、並に英人ジエームス・ブレードに始まるに云へる。ベルトランには千八百二十三年頃に巴里で開板したソムナムビユリズム即ち夜遊病の論文があり、又動物電氣に関する著述もある、それを一層發揚して新にヒプノチズム即ち催眠術なる名稱を賦與し、廣く醫療上に應用したのはプレートで、彼自身も由つて以て強度の筋肉痲痺質斯の激痛を忘れ去つた記事が、千八百四十四年の日附であるから難有い。アーサー・エトワード・ウエート氏の書中に詳である。斯くて彼等の仲間では、神祕主義は矢張り一個の迷信の様に看下けてゐる様でもあるが、併し現代の英國文豪フランシス・グリーソン氏には『近世的神祕主義』の一書があることは、早く吾人の注意を惹いたこと、自分は曩に人間の神祕の演題で、神戸青年會館に於て高調した

こともあり、又『密宗學報』にも特に一文を投じたことがある。然り而して最近舶來の獨逸人ハンマツヘル氏の『近世文化の主要なる諸問題』を披くに及んで、彼が近世宗教の危機は、その科學上より來る一元論を謂ひ進化論を謂ひの爲にあらすして、却て宗教哲學を言ふ者が、動もすれば神祕主義を閉却せんとしてゐるに在る。マルブルク派の宗教哲學は到底合理主義の羈絆を脱却せざるを以て駄目に成る。ヴント一流の客觀的唯心論も亦尙ほ太だ遠い。一方にヘーゲルあり、他方にハルトマンあり、それ々々大に見るべき所ある様でも、未だしを謂はざるを得ない。南獨逸派のトロエルチは固よりカントに出でて、而かも早くエツクハルトに迄も立ち戻らしてゐるのは豪い。オイケンミベルグソンは現代哲學界の兩大關であるが、オイケンには神祕主義的分子少く、之れに反してベルグソンには頗るそれに傾いてゐるのは太だ多きすべしである。然かも眞に神祕主義たるにはまだ到つてゐない。蓋し著者ハンマツヘル氏の所見では二元論の完全なる解決調和は、獨り神祕主義に於てのみ之れを求めるところが出来るに非ない。

斯くて將來は又宗教の研究には必ずや再び神祕主義を重要視する様に成らう。現に米人ジェ

ームス・ビ・ブラット氏の近著『宗教的意識』には全篇二十章中、最後の五章を神秘主義に充て一、神秘的經驗の温和なる形態。二、神秘者ニ彼等の諸方法。三、エクスタシー即ち狂歡。四、神秘的生活及び五、神秘主義の位置ニ價值ニ題して、約百五十頁を費して詳論してゐるのを見やう。之を要するに著者ブラットは神秘者は一個のヒステリー家で、彼等の狂歡は病的顯象だミ速断するこゝには斷じて不賛成らしい。勿論神秘者の極端なるものは弊害が少いミは謂ひ難からう。併しその溫和なる者にあつては貢獻するこゝろも亦多々ある。神秘主義は詩の一種で而かも人間をしてその周圍の靈的環境に對して非常に眞面目ミ成り、人格を緊肅にし、上帝ミ漸く接近し來つて、終に人我を將て神我の裏に攝取せしめて仕舞い、人間の靈魂は神の靈魂の中に没入して、無底の海中に跳り込む様に成る。其處には實は最初から何等人我はなかつた筈で、只神我のあるのみミ謂ふものさへある。將又別に一種の神秘主義ミなるミ、自己保存の慾望を制剋し、自我の消滅を切望するものもある。リボーはそれを沈靜家ミ呼んだ。それは固より自殺を企てはしない。只形而上的全體の消滅を圖るので、これは西洋に少く東洋に多い。それも亦彼我の相對に超越し、神人無別の妙境に入らんミするに外ないこゝは明である。何はミ

もあれ歴史的宗教に一道の活氣を賦與して、生々の意氣旺勃たらしむるものは、偏に這の神秘主義があるからだミ謂へる。

六

自分は斯様に目下宗教界に於ける神秘主義の勃興に留意しつゝ、又他の一面に於て常に醫療並に教育の方面に於ける暗示の流行をも注意して見て來たものである。それは吾が國に於ても亦近年愈々盛な様で大靈道なさいふものは、毎々諸新聞に大々の廣告を掲げてゐるが、固より必ずしもやま、こ視すべきではあるまい。特に夫の祈禱師の濱口熊嶽なさい云へる者は、自ら堂々眞言祕密の加持行者の様に誇稱してゐるミするミ、只噴飯に堪へぬミばかりに嘲笑してはゐられまい。是れに就いて古來存するこゝろの氣合術なさいも、尙ほ一層研究の必要がある様に考へられるが、西洋には從來も早くサツジエスション即ち暗示ミ謂ふ事があつて、今は日に日に隆盛に赴きつゝあるこゝろにも注意を要する。即ち暗示に關する著述は少いミはしないが、只その何をか暗示ミするぞミ云ふ事に就いては、暗示の定義が非常に區々で、殆ど一定する見込がない。就中佛國心理學家ビネーの『暗示性』は、斯道の學者間には相應に權威あるものミ看てる

られる様で、その巻首には暗示を解釋して、一つの動作に、逆變形を受け行くところの、一つの觀念だき書いてある。これは一見明瞭な様で、併し一步深く立ち入つて考へてみると、不十分の譏は免れ難い。蓋しビネーは威風ミか恩容ミかに由つて他を懾服せさせ心服せさすのも、共に這の暗示性の中に入れて看てゐる様だが、そこに早く問題がある。何はミもあれ只單に暗示は一つの觀念が變形しつゝ、一つの動作ミ成り行く状態だき云ふ丈けでは、實は暗示ミ意志の區別なきは毫も分らない。そこで現今這の暗示の事を最熱心に主張してゐる佛蘭西のナンシー學派では、別に新解を下して、暗示ミは一つの觀念の、潜在意識的、現實化だき云つてゐる。然り意志ミ暗示ミは固よりただ克く相肖てゐる。それは兩者共に吾儕の活動の方式で、それは孰れも目的論的原理に由つて支配されてゐる。即ち一定の願望したる目的に到達せんが爲に、不斷に諸の方便を適應するこゝを表現してゐるのである。然かも意志の方では、その目的が意識的であるに對して、暗示の方では潜在意識的である所に、一大相違は存するのである。潜在意識ミ謂ふのも無意識ミ謂ふのも、それは學者銘々用語の嗜好に過ぎまい。

此に於てナンシー學派の事に就いて一言しやう。ナンシーは佛獨往還の大道に存する一つの

名邑で國境より程遠くないが、古都の暮色頗る蒼然たるこゝろで、其處には小規模ながら舊い大學がある。此の大學で千九百十年以來、一個の心理學的にして又醫治教育學的なる運動が始まり、大戰に際して敵軍の兵馬闖入し、亂狼籍を極めたにも拘らず、辛くそれを繼續して今日に至つたのは頗る妙ではないか。それはエミル・クエミいふ一個無名の醫師が、大に志を立て、其處に貧民の爲に無料の施療所を開設し、一面その獨特の暗示の學理を益々深く研鑽しつゝ、又一面には廣く之れを實地に應用して愈々經驗を累ねつゝある事である。試にその淵源を遡尋して見るミ、前述の通りアレキサンドル・ベルトランあり、ジエームス・ブレードあつて、前世紀の中葉頃に早く催眠術は開けたのだが、爾來英佛諸國には色々の學説が行はれ出した。ジエームス・グツダルトはその『普通神經病』の講義に於て、催眠術に由る治療の奏功には種々の條件があるが、就中それは内面から起つて来る様にしなければならず、その深底裏に眠れる力を喚醒して來ねばならないミ主張した。即ち反省的自己暗示に最重きを置いたものである。然るに稍々後れて出來たジエ・マリオン・ブラムウエの『催眠術』には自己暗示の事は一言もしてないらしい。然り而して佛國ではシャルコーやサルベトリエールの學派では、催眠術は病

的狀態で、大ヒステリー或はヒステリー性癲癇の發作に外ならないとしたものもある。

然かも今日では斯かる議論は、業に已に古物視されざるを得ず。それよりもナンシー學派の方が眞正だに承認されて來た。それは最初リエポールが貧民患者に施療したのに起り、それをナンシー大學醫科教授のヒポリット・ベルンハイムが科學的に一個の學説として建設し上げたのである。而してエミル・クエ氏は千八百八十五年より八十六年に互つて、リエポールの業績を見學し大に悟るゝところあり。更に遠く笈を負うて米國に渡り、一層廣く研究して怠らず。やがてリエポールの後を襲うて、ナンシーに無料施療所を開始したことは、前陳の通りである。而して瑞西ジエネヴァ大學にシャルル・ボウヰンあり、そのクエに於けるは猶ほ曩にベルンハイムのリエポールに於けるが如くにして、クエの業績に學理の根據を與へ、近頃同地の蘆騷學院（ランスチチュー・ヅ・ジャン・ジャック・ルツソー）に於て講筵を開き、その筆記は更に英譯せられて『暗示と自己暗示』の表題を以て一昨年末倫敦に於て出版し、自分は始めて大正十一年一月東京雄文社發行の『醫學及醫政』の新年號上に於て、畏れながら今上陛下の御病症に關聯して紹介して置いた様な次第である。クエ氏は最近米國に出張してゐるらしい。

然り這のナンシー學派は自己暗示即ちオートサツゼスションを主とするもので、それは固より内面から自發するのであり、何等外部よりの干渉を待たず、只考へさへすれば出来る。それは潜在意識中にある知識なり力なりが能く自心機制を支配して行くからださるのである。凡そ這の説と相近きものが、現行の學説中に二つある。その一は奥國の婦人科醫フロイド一派の所謂精神分析派の唱ふる所で、感性の側面に重きを置き、識圖の下に一大複雑なる感激叢があり、情操や傾向の潜在するところであつて、吾儕銘々之れを知らず覺えずして、常にその左右するところを成つてゐるから溜らない。精神分析で以て這の深く藏められたるものを顯露し、而して之れを制御して、その壓迫を逃れやうと云ふのである。又その二はベルグソンの主唱するところで、復現の方面に重きを置き、睿智と直觀とを區別し、直觀の方が却て深く内在して而して吾儕人生に取つて最も必要な知識を含藏してゐるのであり、這の直觀を究めて行くに尋常一般の智惠分別では知り難いことも亦容易に知れるとする。此等兩説一方は感情に關し一方は知識に關するに對して、這のナンシー派は更に活動の側に重きを置き、本能でもなく、習慣でもなく、意志でもなく、只管暗示に由つて活動を徹底せしめ得べしとするので、感激叢の

情緒に對し、直觀の睿智に對する如く、暗示は意志に對する譯である。

然り而して這のナンシー派では、それを以て常に醫療上に用ふには足れりませず、否寧ろ教育上に用ゐて始めて偉功を奏すべしと謂つてゐる様である。それは既にギユイヨーあり、キーチンジあるが、更に一步を進めたもので、特にその倒逆的努力の法則（ロウ・オブ・レヴァース・ド・エツフォルト）の如きは最も妙であり、一言すれば意識上で明に志すもの、逆手を、自己暗示に由つて遣つて行かうとするのである。自分は近時宗教界に於ける神祕主義の復興と、心理學界並に醫治教育學界に於ける自己暗示の高調とを、彼此思ひ廻すも、吾が佛教別して眞言密教の前途開拓上に、多少の參考となるべしと考へ、『智山學報』（大正十一年六月）上に於て些か所見を開陳して置いた様な次第である。

藝術界の前途

一

藝術とは何であるか、今茲にはそれを社會的の一大設営として觀る場合には、勢、寧ろ藝術家

と云ふものに就いて言ふ様に成らう。ヘンリー・テインがその有名なる『英國文學史』の中に曰つたことがある。一大作家の精神はその不斷の變態に由りて無限に複雑と成るが、一面では宇宙の抽象と成るもので、人類動物、草木花卉、山水風景その對象の何であるに拘らず、その活物たるを否を問はず、直接の看透に由つて感ずるのであると、文中抽象の二字は屹度注意を要する。それは或は概念構成の智的作用を意味するを看られる虞があるからである。併し此處に所謂抽象は、先づその眞髓を看破し把握し抽出するを云ふ事に解せなければならぬ。然らばそれで以て又藝術の何たるかも、略ぼ分からう。總じて藝術とは美的價値の創造である。藝術家は創作する人であつて、而して創作とはその獨得の眼光で、事物の生命の躍動して未だ休止せざる實相を見詰め、やがてそれが自ら表現せらる事であるを云ふ、最新しい進んだ解釋にも亦、此のテインの言ふところは、相應する様である。藝術は自然の模倣であるとか、感情の移入であるとか云ふのは未だして、藝術家は只見詰めて自らそれを表現するところに、その固有の約束はあるのである。即ち藝術家は復決して實在の表面のみを見て満足し、形式的に之れを統一し、概念とし又言語として、強いて一定の不變不動の型に入れて以て安んずる者ではな

い。その対象は固定的でなくて、常に流動するもので、其處に表現はあり創造はある。タイムが直接的に看透するに云つたのは、此の意味に解されやう。

夫れ然り、藝術家は勢他の衆俗は離居し孤立するを免れまいし、社會の一員として他人々相共に奉公の爲にそれ相應の務をする意志もなければ餘裕もなく、終始只その天分とするところの仕事に没頭する様で、一言すれば極めて非社會的だに謂つて然るべきだらう。従つて又他人の中に伍して生活して行くには、何か自身に由つて立つ所の地盤を有するものでなくては、忽ち窮境に陥ることは已むを得ない所であらう。斯く藝術家が生活の爲に一定の特別なる地盤を必要とするに於て、實際社會が之を提供するは、先づ當該社會が文化の一定度に達し、經濟的隆盛の一定度に達して居らなければならぬ。斯かる社會にして、始めて藝術家をして幾分たりとも他人の許諾を得て時間の餘裕を有し、生活の必需品を供給せられ、尙ほその創作上に要する材料や道具をも供給せられて、自由に生活して行く事が出来る様にするのである。されば其處に窮屈な社會的規制が行はれて、些の寛裕の無い所では、藝術家は手足を伸ばすことは出来ず、又物資の極貧な所では、彼等は餓死する外あるまい。只高度の開化に由つて

少くも其處に一定度の自由が發達して居り、多少の過剩があつて、少數者には尋常一般の生活上の需要以上に出づることを許す所に於てのみ、藝術家は生存し、藝術は榮え行く次第である即ち其處に文化の曙光は認められやう。

米人ロウエル氏の『デモクラシー』の中に、開化に進歩の眞の根柢は、人間が彼等自身より一層良く又一層美しきものを賞賛する本能だに云つてゐるのは、當つては居るが、然かもそれと共に開化なく進歩なければ、所謂一層美しいものを創作する人は生存し得ないことも思はなければならぬ。吾が國古來藝術が太平の盛時に於て、而かも有力者の保護の下にのみ、特に榮えたことは無理ないことで、それが宮廷藝術であり、神社佛閣の藝術であり、大名豪族の藝術であり、乃至大町人の藝術であつたのは、孰も時勢の自ら然らしむるものだに謂はなければならぬ。従つて又將來民衆の勢力が漸く強盛になり、その資力が充實して綽々餘裕ある様になるに伴れて、其處に眞の民衆藝術の起ることは期待して違はない。目下の露西亞の様では、當分何等の藝術は出来ないかも知れない。教育主任のルナチャルスキーは、一面勞働本位の教育を催進すると共に、一面頻に藝術の奨励を務めてゐた様だが、併しそれは寧ろ舊來の美術を保

存するに力を盡くしてゐるのらしく、従つて演劇なきも亦可なり盛んな様であるが、まだ眞に民衆的たり労働者本位である新しいものは起らないとも謂へる。勿論露國の藝術が爾餘諸國に比して、著く民衆的たり労働的であるのは、よく知れてゐる。獨逸人リヒャード・ベンツ氏はその新著『獨逸教化の基礎』(一九二〇年)に於て、獨逸今後の文化は主として藝術に由る者たらしめなければならぬと云つてゐる様だけれども、それも今日の窮狀を以てしては、却々容易な事ではなからうと考へる。之れに反して米國は今迄は藝術の點に於ては頗る貧弱だとの譏を免れなかつただらうが、その異常なる物質的隆盛は、近き將來に於て、必ずや又藝術の勃興を見るに至るに違ふまい。

二

尙ほ之れを關聯して、自分は今茲に美術を謂はずして藝術を謂つたところに、一寸注意して貰ひたい。蓋し美の果して何者たるかに就いては、今尙ほ議論は區々である。自分は只單に獨自固有の美意識に由つて爾か認むるものと云ふに止める外ない。然かもそれは普通一般に美しいと云はれるもの、創作的表現を旨とする譯ではない。否實際には随分醜なるものもある。愉

悦歡喜の狀態ばかりでなく、却て數々悲哀悲愴の場合が表現せられてゐる。即ち其處には快樂よりは却て苦痛の方が多いかも知れない。何はともあれ人生をその最も眞摯な活動の刹那に於て、確に見詰めて之れを理解し表現せんとして已まないところに、藝術的製作の契機はある譯である。それが恐怖であり、悲哀であることは毫も構はない。勿論それは智的でなくて感情的であるが、又道徳的ではなくて美的たるもので、美は眞善美並んで而かも各々獨立した文化價値である。只その發揮せられ出したのは、比較的遅いことは事實で、理由は前述の通りである。美意識の發動が、模倣の本能に由るか、遊戲の本能に由るか、戯曲の本能に由るか、さては又所謂勢力過剰説で見て行くべきかは、今茲には議論を省くが、只自分の所見では、それは孰も各々立場を異にしてゐるのであるが、概言すれば勢力の過剰を云々するものは、寧ろ創造可能の境遇的條件に重きを置いたもので、而してその本質は寧ろ本能を看るのが當然だらうと考へる。然かもそれは創造の本能を表現の本能と謂ふ方が、何となく一層適切な様に思はれる。カントの之れを判断力と見たのは、畢竟所謂價值判断と云ふ邊を主としたからであらう。さて世間多數の藝術家はさかく常に貧窮に困む様で、特に青年期にはさうだとも云へる。併し

又一旦有名になつた後でも、尙ほ依然素寒貧たるものは少くない。畫家成金も最近は吾が國に多く見る様だけれども、それは全然變則で、古今に藝術に身を委ねるものは、往々餓死するさへある様だ。畢竟彼等は何等經濟的動機を持つてゐない筈で、自家の生活や費用に對して、直接に經濟上の筋途の立つてゐるものは極めて稀であるらしい。經濟方面から觀たれば、彼等は蘭の如く百合の如きもので、其處には刺も何もない。彼等は自ら知覺する通り他人にも知覺せしめ、自ら感賞する通り他人にも感賞させやう云ふので、只自ら爲さん欲するものを爲さんとしてゐるに過ぎない。即ちその動機は愛他的で社會的で、只管他人を目當とし、若し偶々主我的に見えることかあつても、それは只表面上だけに止つてゐるやう。藝術家にも勿論妻子はあり得る。併し藝術の爲にはその家を忘れ、家族の扶助は隣人に頼み、或は公費を仰ぎするのも亦珍らしくない。昔ダンテは他人の食卓に就いて麵包を食ひ、又他人の家の階段を昇降しつゝ、一生を費したさへ云はれて居る。追放詩人としてはそんなものであつたらう。彼は只夢寐恍惚として、美の中に正義と自由を求めてゐたものである。近時バルサツクなきも陋巷の屋根裏で、その傑作の『コメディ・ユーメーン』を書いた云はれる。吾が國の古今の名匠た

る左甚五郎なる者は、果して眞にその人があつたかさうかただ疑はしい様だが、併しその傳説は如何にもよく藝術家氣質を描き出してゐる様に思はれる。

夫れ然り、藝術家はやがてその作品に由つて一番大に天下の耳目を聳動させやうと志してゐることにはあらうが、併しその苦心慘憺たる間は、世界に對しては死人同様で、目前の快樂は固より毫も考へず、否將來の名聲さへも殆ど眼中にない程で、普通一般の肉食者流は彼等藝術家の孤獨で孜孜と勉めてゐるのを觀て、或は罪人視し、或は狂人視することさへある。これを心理學上より説明せんか、誠に是れ固執觀念に由つてせられたる心的攻圍の顯著なるもので、由つて以て一切の行爲を嵌制すべく強く躍動せるものだ謂へる。若しそれがその儘に長く繼續したならば、彼は屹度狂疾に陥らう。幸にその一つの仕事の手を離れると、多少休養の時間があつて、その間は娛樂に耽り、數々その身をも忘却するものもある。併し斯うして徐に心身の健康を回復し、尙且つ新着手に向つて豫め觀念を蒐集しつゝ、あるのだとすれば、敢て深く咎むるにも當らない筈で、放蕩豪華も輕々看過すべきであらう。即ち目下の我慾は究竟の無我と成り得る譯である。

更に進んで論じて行くに、彼等の現在の主我主義は、只是れ一個の高上したる人種意識の形態に外ならないとも云へやう。それは場合に由つては随分嫌な事もある。併し天才は勿論、特殊の高級の能才でも、亦銘々固有の法則を有するもので、それを尋常庸流に一律に律し去らうとするのは馬鹿らしい。天才高能は飽迄も只各自固有の遣り方で遣つて行くものたることを認めなければなるまい。それを昔は随分社会的に虐待し、甚しきは死刑に處した場合も稀有でない。畢竟普通の風俗習慣から離れて、獨り異風を標榜するからで、異風はやがて罪だみ見たからである。今や世は漸く進んで藝術家の言ふ所に聽従しない迄もが、之れをして各々獨りその欲するところを往くべく寛容するに至つたかすれば、それは確に文化の程度が高く成つた一兆候だみ謂へやう。たゞ目前に多少の科はあつても、その最後の奉仕を期待して、之れを寛容するほぎであつて欲しい。勿論決してその科それ自身を善しき賛成する譯ではない。従つて漫に之れを模倣せんとするなきは到底許し難い。總じて何事に拘らず他人を模倣するに云ふは、その才の劣等を自白するものであることを承知して貰ひたい。

社會は藝術家が生みに惱んでゐる間は成るべく之れを寛容し、而して一旦その標的を射落した時は、則ち之れを推崇して聖徒にする様である。蓋し人間世界は頻繁に覺醒を要するものでそれには藝術家が卒先之れに任すべき筈である。藝術家の創作は實に慈悲憐憫愛情並に勇武の牧師であり、又智恵の教師であるとも謂へる。藝術は宗教には本質的に不可缺のものであり、又愛國心に取つても頗る必要である。委しい事はハリスン氏の『藝術と宗教』(一九一八年)を看よ。

但し藝術の盛衰には自ら干渉の潮時があることは争はれない。古アゼンスではペリクルスの時を極盛とし、羅馬ではアウグスタスの世を黄金時代とする。今日歐洲の諸方に巍々として聳ゆる大伽藍は、第十三世紀に出来たものが多い様だ。而かも英國では近時ヴィクトリア女王の治世を以て小説文學の最盛時にしてゐる。將又藝術には自ら國土があるとも謂へる。北伊太利は繪畫の國であり、佛蘭西は彫刻の國であり、獨逸は音樂の國であり、英國は小説の國である尤も所謂心理小説は今では却て露西亞を推さなければならぬ様だ。米國は藝術の點では未だ幼稚の域を脱せざる事は是非もなからう。蓋し米人は兎角實利實益に汲々として、他を顧みる暇

がなかつたのである。例へば米國では寺院なごも藝術に貢献した所は極めて少い様だ。併し此處にも亦今は追々藝術隆盛の曙光は見えてゐる。特に今度の世界大戰は、頓に藝術の尊重心を覺醒した様で、兵燹に由る古建築古美術の損失は大に悲憤の種を蒔いたらしい。知らず吾が國藝術の前途は果してさうであらう。藝術はその本性から觀て常に一個の從屬的社會設置でありその發展は週期的で而して頗る氣質的のものなれば、豫め計量することは出来ず、又指示することは出来まい。それは飽迄も人間天性の最崇高なる純化で、それは實は極々少數者の能くするものであり、他の一般庸衆は皆之れに負ふ所が大なるものであることは承知しなければならぬ。藝術は固より勞働に由つて生み出されるものではない。然かも將來民衆的勞働國家の藝術は、復決して既往の貴族的、有産階級的のそれとは同一である筈のないことは、喋々を待つまい。由來吾が國では雅俗の差別が喧しく、雅を貴んで俗を賤む様だが、然かもその所謂雅なるものは、大抵宮廷的貴族的であつて、その起源は昔時遠く外方より移植されたものが多い。之れに反して俗の方は自國民族中に自發した野生的のものであるが、自分は却てこれを面白いと看るものである。

四

斯くて今茲に因みに最近歐米藝術界の趨勢一斑を附言するのも亦無用であるまい。蓋しそれは右陳べた所と相待つて、藝術の前途如何を知ることが出来やうと思ふからである。然り藝術界も亦目下確に一大動搖を醸してゐることは争い難い。回顧すれば近世史の初、文藝復興の後に於ては、藝術界にも亦固より古典主義が大に行はれてゐた。それは希臘流の極めて靜的な高雅の簡單主義に出て、凡そ人間性にはそれと一般の固定的理想の類型があること云ふ考に基づいてゐたのである。蓋しこれは固より嘗に希臘ばかりではない。吾が國でも古來の美術は皆それで、それは現に佛像の圖畫彫刻に於て、儀軌を喧しく言ふのを見ても分からう。然かもその弊は藝術と實生活とは全然別なものに成つて仕舞ひ、實生活は不斷に流動するに對して、翰林派は永く固定して動かないこと云ふ結果に成つた。若しそれ夫のロコロなきの裝飾主義に至つては復何等の意義をも認め難い。その後第十八世紀より第十九世紀に互つて諸方面に大に流行した浪漫的派は固よりさうでない。或は之れは古典派の餘りに靜的なるに對して、その反對に他の端極に奔つて大に動的に成つたものだと云へる。併しそれも矢張り何者にか因はる、所

たることを免れ難い様だ。

蓋し浪漫的派にも、獨逸流ミ佛蘭西流ミは、自ら相違がある。獨逸流では、形而上學的に始つて、漸次に極端なる主觀主義に走つた。即ちそれはヘーゲル一流の客觀的唯心主義ミは、全然區別されべきものである。斯う成つて來るミ、それは又格別に音樂に於て、大々的にその特色を發揮する様に成るのは當然で、實にリヒャード・ワグナーの音樂はその極致ミ謂へやう。それは實に無限ミ云ふことを好く體現したものである。然かも他の一面より之れを見るミ、それは又シヨペンハウエル一流の内容的美學ミ合致するミに於て、一定の拘束を免れず。その類に神話を題材ミするミところは、又何ミなく古典派の餘影さへあるミ云へる。之れに反して佛蘭西の浪漫的派は、實證主義の影響の下に立つミところから、自ら感官的汎神のものミ成つたのは、勢の然らしむるミところであらう。従つてそれは又啓蒙時代に於ける自然主義ミ相提携して、専ら現實相を曝露的に映寫せんミするミに於て、際限を見ない様に成つた。

此の浪漫的派より一轉して、第十九世紀の後半期を吾が物顔に振舞つたものは、印象派である。これは佛人エヅアルト・マネーが開祖で、その名稱は實に千八百六十七年の巴里萬國大博

覽會に始まつた様である。それは固より畫家の主として高調したミところで、凡そ畫家の任務はその自ら見た儘の事物の印象を寫して他人にも同じ様に觀せしめるにあるミした。クロード・マネー亦此の派の驍將である。勿論同じく印象派ミ謂ふが中にも、三大別がある様で、マネーは現實の複寫に重きを置き、マネーは又類に光線の美觀ミ神祕ミに重きを置いた。而して別にドガミカルノアールミかは、人生の或る瞬間の鮮活なる一面を把捉し眼光對象の背後に徹底してその眞を寫し出さうミ努力して、復區々たる細節に拘泥しない。此等種々の印象派を通じて日本美術特に版畫の影響は輕々看過し難いミ云はれて居る。

同じく印象派中にも既に右の三大別あるミことは、早く其處に進歩の跡歴然たるものがあるのミで、ルノアール一派は實は後期印象派への橋渡だミ謂つても妨あるまい。然かも其處には固より一大鴻溝は劃してゐる。蓋し後期印象派なるものは、實に印象派にもまだ色々傳統的約束の制限があるミして之れを免れ、遂に高く超脱せんミするもので、それは第一に色彩的顯象を措いて、他の全然異りたる方に移らうミしてゐる。それは色彩的顯象の外に、構成的形式を以て遣らうミ云ふので、セザンヌやフィンセント・ファン・ゴッホ(ゴッホ)や、並にゴーギャンな

ごはその唱首である。ファン・ホッホは實に此の自然界を一個の活きた諸勢力の集りご観、セザンヌは空間の動勢は純粹の精神的表現だご云つてゐる。ゴッギャンは逸早くそれを實施した斯くして藝術は復決して模倣の事ではなく、その主眼は素より創造でなくてはならぬごして、其處に印象派や自然主義への反動がある。即ち後期印象派では、藝術家の天然並に人生に對する感情的經驗を適宜表現するのが藝術の目的で、その他の事は全く副たりごする様である。

即ちセザンヌはすべての法式を蔑視し去つた様で、然かも實は最高の意味で法式化してゐるごも謂はれてゐる。畢竟彼は常に自身の本能に導かれてゐるもので、其處に非常な汪溢が與へられてゐるのである。例へばその梨や林檎の靜物を描くにしても、構圖は極めて平凡で、只此等の物が机上を轉がりつゝふご止つたごいふ様に看て、復毫も豫め斯ういふ風になごご、工夫した痕跡は認められない。それで其處に何ごも言へぬ實在の味が出てゐるから妙だらう。勿論その人ご爲りは至極隱遁的で、別に革新者らしいごころはなかつたさうである。

ファン・ホッホは少しくこれごは異つてゐる。然かも彼も亦頗る我儘氣隨で、豫め布置に關しては何等思ふごころなく、効果如何に對して畫策するごころはなかつた。即ちその畫は、描

いたご云ふよりも、寧ろそれを畫布の上に吹きかけたご云ふが適當であらう。否少くも畫筆ではなくて、何か石工の道具で以て彫りつけた様に見える。従つて其處には區々たる法式なごは措いて顧みられない様で、然かも何ごなく超人間的努力がある様に感ぜられ、生き生きごして力が籠つて居り、時に熱烈なる叫喚をさへ聞く様である。凡そ此等の批評は固より自分の獨斷ではなく、その本は主ごしてマイエル・グレーフェの有名なる畫傳に據つたごごを附言する。

但し斯くは言ふものから、新印象派ごして判然成立したのは、セザンヌなごより稍々後れて寧ろスーラ並にシニヤニックごかクロツスごか乃至ブチジャンなごを擧げるが至當かも知れぬ然り而して印象派ご新印象派の相違を、畫術の上より説明するならば、印象派は主ごして自然の外衣たる光ご色ごを尙び、而かも瞬時的効果を追ふに汲々ごしてゐたに對して、後期印象派の方は先づ調色板上の手續を投棄し、それに代ふるに色彩を個々獨立したものごし、相觸接して而かも相反撥させ、相隔離して而かも互に結合させやうごしたので、一言以て之れを蔽へば分解的方法を取つて、而かも却て力強い綜合効果を收め様ごし、其處に一々の色彩の表現を一層完成させやうごした。是れが右に掲示した構成的形式云々の意義である。即ち美術は諧調で

あるといふ一言は、これを説破して餘すところがないと云へる。

想ふに夫の自然主義は實に時代に於ける科學萬能の思潮に乗じたものたることは争はれまい然かも印象主義は其處に早く科學への反抗を企てた跡があり、後期印象派は更に一層進んだものだとも謂へる。否何はともあれセザンヌやファン・ゴッホやゴーギャンなどは、孰も從來襲踏した知識の外衣を破却せんとしたことは現著なことである。即ちそれより延いてシャツセリオやルドンの様な神祕主義象徵主義の、沈黙的で靈感的な藝術も出て來れば、アンリ・ルツツの様な還元的な原始的な素朴な純愛を旨とするものもあり、終にマチスの様に又理智の上から單純化し行いて、其處に生氣の潑刺たる表現を得やうとするものもあつたのも當然であらうそれは一切の仲介を排斥して、専心一途に自然の核心に透徹しやうと試みるもので、その極まるどころ立體派が生れ出し、更に一步を進めて未來派があるといふ有様である。

五

立體派はピカソを唱首とする。その最初の展覽會は千九百十一年巴里で開かれたのであらう蓋しピカソは夙に藝術上一切の約束を打破し、元氣旺盛なる野性に復歸して、其處に前人未踏

の新境を開展しやうとしたもので、偶々亞弗利加土蠻の彫刻に接して、大に好奇心をそゝり、新に黒奴繪畫なるものを創削したのである。然り而して這の土蠻藝術に於ける妙諦は、實は只極めて簡單な立方體を集合させて、其處に不思議な生氣の躍動を見るといふことに重きを置いたものである。勿論それにはやがて立派な理論が構成せられてゐる様で、その略に曰はく、凡そ眞の繪畫といふものは、只單に光線ちや色彩ちや、視覺の末に局限しては出來る筈はない須らく深奥なる智力の認識に待たなければならぬ。それには又眞の世界は普通一般の視覺の世界とは全然別で、一切の物象は體積の集合として現はれるのである。これは所謂直覺であり內的認識である。従つて繪畫は斯の體積感を表はすに最都合好き簡單なる幾何學上の單位特に立體を反復使用して、一大効果を擧げんことを企つべき筈で、色彩なきも亦寧ろ裝飾的に自由に使用して、其處に何等の拘束はない様にするべきを努むべきであるとする。斯くてそれは勢、内面的寫實の表現に成り、又著く主觀主義的態度を執る様に成つた。但し實際は早くこれは邪道に踏み込んだものだとして、餘り多く重きを置かれてゐない様だし、最近にはピカソの本案本元がさうやら之れを棄てたらしいといふ噂も聞いた。

否邪道云へば、未來派は更に一層邪道の甚しいものであらう。それは最近伊太利に起つた藝術上の革命運動で、固より獨り繪畫には限らないのである。詩人マリネツチ等の千九百九年以來熱烈に宣傳してゐるところは、一切の傳統因習は悉く破壊し去らう云ふのである。而して翌十年には早く倫敦へ乗り出して展覽會を開いてゐるから驚かれやう。その根本的主張は、近世諸科學特に機械工業方面の發展や、革命的政治運動、社會運動の齎した動亂を謳歌し、それと同様の律動を以て藝術的創作の中心生命としやう云ふのである。むつかしく云へば運動そのものを直に成形化せんとするもので、之れを繪畫にして見ても、從來のもの、様に只單に一人物の一刹那の姿態なきを、畫布の上に寫し出さうとするのではなく、常に普遍的運動性の感覺を活躍せしめなければならぬとする。従つて又從來の畫家は物體や人物を描くに際して、それは只吾人の目前に陳列し展開した様に寫すだけであつたが、それは悪い。今後は須らく畫を看る人そのものを取つて、直に畫中に置かなければならず。而してその人の現に看るところと又記憶するところを併せて、綜合しなければならぬとする。換言すれば只生の一小區劃をば技巧的にその舞臺面に現はすに止らず、目前の物象の背景に存して、常に活動する隠れたる物

象や、吾人の左右并に後背に在る一切の物象をも、悉く其處に現はさなければならぬとする。何はともあれ自然は皆常に動いて休止せざるもので、庸人の看て靜止してゐるものも亦實は不斷に運動して、寸時も休まない。而して網膜はその遺像を尙ほ暫く保存するところから形貌は非常に繁多になる譯で、奔れる馬は四脚でなくて、二十脚もあるべく、その運動は三角形であるなき云つて居る。此等各個物にそれ〴〵特有の律動や傾向を精細に寫し出すとが緊要で、獨り人物ばかりでなく、一切の無生物も亦その線で以て喜怒哀樂を示してゐるを看過してはならないと迄強説してゐる。此の意味で繪家ボツチオニ等は又頗に強力線といふことを高調し、物はその強力線で無限に延長するもので、それは只吾人の直覺に由つて認めることが出来るから、呼んで物理的超越主義と曰へる云つてゐる。

斯くて此の派の人々は何に由らず、すべて動亂を好愛して措かず。疾走・衝突・狂奔・激亂熱狂を題目とし、大工場・電車自動車・汽車・飛行機乃至爭鬪戰爭、革命無政府主義を資材としてゐる。その畫面は常に變化があるのみならず、混雜で交錯的で、固より區々の論理を以て律するところは許さない。甚しきはその繪面に煉瓦石や木片や襤褸なきを貼付し嵌入して得々たるも

のさへある。之れを他の方面より觀察するに、彼等は又何事に由らず、沈靜・休止・睡眠・默想等は絶対に排斥せんとするもので、博物館や美術館に蒐集せる古來の美術は一切破壊し去つて其處に始めて吾儕自身に更生し、感覺に於て一個の原始人たり得るのだと云つて居る。近頃羅馬邊には未來派の酒場といふものがあり、イヤハヤその濫雜はお話にならぬと聞いた。

知らず此の未來派こそその名の通り、吾儕が將來の藝術たるべきものであらうか。それは所謂民衆的勞働國家に相應したものだらうか。或は何もなく過激派向きの様にも見え、無政府主義者流の様にも思はれて、ただ恐ろしいが、それは固より獨り繪畫ばかりでなく今日は更に音樂上に於ても瑞西を中心とし、ダダ主義なるものが行はれ出してゐるに聞いて一層驚かざるを得ない。蓋しこの主義は素未來派の所謂騒音樂を繼承したもので、それは曩に例のマリネツチが鐘詰の鐘や深鍋や小兒の玩具たるガラノ、なを併せて、同時に一種の騒音を爲し、以て「首府の目醒」を表現したのに淵源する。即ちそれは音響の同時性を基底とし、事物の時間的經過に對して、鋭敏なる感覺を前提したもので、やがて又耳の問題を目的の問題に變換せんとしてゐることも謂へやう。これに因つて又自分は端なく吾が勞働者が石油罐をた、

き、金盃をた、きて騒ぎ廻ることを聯想しない譯には行かない。想ふに夫の古風の東遊や駿河舞の神樂は、いたく神さびである。雅樂は宮廷樂で、謠曲は武家樂である。江戸幕府三百年の昌平はその外に、尙ほ幾多の語り物、歌ひ物を産み出した。然かも大抵有産階級的のものたるざるはない様である。明治大正に及んで、或は浪花節の盛行するあり、筑前琵琶なども亦廣く行はれる様だが、然かも惜い哉その題材に於ては孰も未だ勞働者本位たるものを見ない様である。目下喇叭節、安來節の流行等も果して如何であらうか。

六

繪畫並に音樂と最密に相關係するものは、舞踏並に演藝である。舞踏は今世紀に入つて早く古風の上品なる英國流のものは漸くすたり、却て米國式の極めて挑感的なるものが、東西を風靡しつゝあることは、復喋々を待たまい。然かも大戰後は又舞踏にも同じく未來派なるものが出來たと聞いては、殆どその底止するところを知らずと謂はねばなるまい。舞樂や能樂の貴族的なるは言はず、舞と謂ひ踊と謂ふもの、亦有産階級的たるは争はれない。否盆踊の如きも亦頗る野趣はある様だけども、それが將來永く都市の勞働者に向くか否かは疑はしい。民衆的

勞働國家の民衆には今後如何なる舞踏が一般に行はれる様になるだらうか。所謂未來派なるもの亦固より參考の一助となるに違はない。

凡そ演劇が今は既に行き詰りだまは、内外到る處で聞く聲である。然り西洋近時の演劇は、繪畫のその様に、印象派も後期印象派も皆々順次に試みられたらしく、其處には神祕派もあれば象徴派もあり、又表現派もあらう。而して立體派や未來派も亦固より種々奇抜の企てを爲して止まなかつたらう。それは最近には復何もなく還元的傾向が見えてゐるこのこも聞いた。果してそんなものだらう。最近マックゴワンの『明日の演劇』を手にしたが、舞臺裝置や舞臺藝術に於て、色々教しふるこもがあるが、演劇そのものに就いては再考を要するものあらう。

それに就けても自分は又先年バルマーの『演劇の將來』(一九一三年)なるものをも見たこがある。それには又自ら別途で、演劇そのもの、將來の變化の針路を説示してゐるが、要は前世紀末よりして英國劇壇に於ける自然主義の高潮を論じ、それはトルストイ・ゴルキー・チエホフ井にイブセンの影響頗る大なるものあるらしく、更に仔細に考察して見るこ、其處にバ

ーナード・ショーの偉大なる勢力が明に認められる。然かもそれは構成的ではなくて、只一切の舊物を破壊し去らうこいふのであり、特にその社會改造の哲學的意見を宣傳せんこ企てたものたるこを見やう。その同志にはハンキンあり、ガルスウオアシーあり、ペーカーなごがある。想ふに彼等の英國劇壇一洗の功は永く録すべきものであらう。併しそれは固より何時迄もそれ丈けである譯ではない。一體英國の演劇は英國人の生活の反映で、英國人の心は固より古典的ではない。それは寧ろ浪漫的であるこは如何こもし難い。只それが今日は復昔の様にリットンやウイルズなきの流を汲まず、寧ろ固有のシェーキスピヤに立ち戻つて、而して其處に新味を看出さんこするのだこ云へば分たらう。こにかく一切の大なる藝術は固より決して不確實なる真理の發見に汲たるべきではなく、一個人の靈魂の進路を辿るこが主眼で、それも過渡期に於ては、環境の變化に再適應せんこ不斷にもがいた様だが、今は已にそんな時代は去つて、やがて新境遇に安住する様に成り、斯くして演劇は又自らその單純性こ勢力こを回復すべきである。いつ迄もストリンドベルヒばかりを手本こすべきではない。勿論斯く云ふ事は何も教訓劇を可なりこするのではない。そんなものは演劇の本領ではない。只ベルグソンの言つ

た様に何にしても積極的に究竟性の或る者がなければならぬと云つて居る。此のバルマー氏の看方も亦追に藝術近時の潮流を看取したものであるが、それにしても未來派なところは似ても似つかないのは、英國の英國たるところで申さうか。否自分は其の本が世界大戰の前に書かれたものであることを看過する譯には行かない。

それについても又自分は今日内外各國到る處に活動寫眞の流行するのは、確に藝術の運動性を表現したもので、それが左様に民衆の嗜好に投ずる所以は、固より他に色々の副因もあらうが、それよりも根本的理由は這の動的なところにあり、特にそれが本來の取材方針は極めて破壊的であつたのに、多大の興味を促がしたものだと思ふ。勿論それは今は何處でも檢閲が頗る嚴重で、監督が行届く様だから、追々面目を一變したとも謂へやうが、併し是れ亦強いて教育的にしやうとするなきは、藝術本位から看てはをかしい。自分は未來派の藝術は、例へば演劇上では、少くも這の活動寫眞の上に甚大の交渉をもつてゐる様に思はれる。従つて現に吾國に於ける舊劇の活寫の如きは、實は折角の這の新藝術を冒瀆するものだとして、唾棄して顧みない。

七

右は美術中に於ても主として音楽と繪畫とに就いて言つたのである。想ふに此の兩者は實際その範圍の廣い事から觀て、斯うしたのは當然と考へられやう。然かも此の近世美術の傾向は又詩美や散文美の上に亦著く現はれてゐることは争はれない。只他の音楽や繪畫の様に、それが廣く明に人に知られてゐないのは、確目なり耳なりに映じない爲かも知れない。仍つて今茲には暫く獨逸を中心として一言しやう。

諸獨逸現代の詩界に於て古風の理想派と新風の印象派との間に卓然として屹立してゐる者はグロエーセ・ヘツベルであらう。その位置は猶ほ音樂界に於けるワグナーの如きものであると見た。即ちそれは實に高大なる世界觀に由つて立つものと謂へる。而してそれは兩者共に藝術を以て形而上學的存在の映寫だとしてゐながら、その映寫は實に直接に内容に由つてして、形式に由つてしやうとしないところに注意しなければならぬ。蓋しそれは彼の師たるシヨツペンハウエル並にヘーゲルに負ふ所が多く、ヘツベルが悲劇を解して、自意識の二様の相異なる段階の間に於ける争闘だと思ふは、確にヘーゲルに出てゐるに云へやう。而してそれ

同時に未だ悉く古典的内容美學の羈束を脱せざるが故に、藝術は到底方便であつて、獨自の目的のあるものでなく、未だ形式に於て最高なるものに到達しないのは是非あるまい。

然るに今又之れに伴うて實在主義並に自然主義が鬨聲を揚げる様に成つたとは、大に注目を要する。ミ云ふのは、彼も此も共に廣義の浪漫的たるからである。蓋し此兩主義は藝術の爲に新なる如實性を提供したもので、飽迄も自然主義的極端を保持することを原則とする。而してそれは自ら社會問題を格別に尊重する様に成り、一個人を観ることを只是れ其の環境の所産たるに過ぎずとする様に成つて來た。ハルトマンやゾーデルマンはその好代表である。これは實に啓蒙時代の根本的謬見から結果したものだミ云ふものもある。その是非は暫く措き、此等の稱して新浪漫的象徴派ミ云ふものでは、さこ迄も相待主義であつて、人間内面世界の心理的分析を大に務める様である。それは眞を得るミ云ふことの意志が主として、叙述法ミか文體の美ミか云ふ事は、自ら一向に構はなくなつた。而してそれは又確に一方にはニーツェの影響も少くない様に思はれる。斯様な形勢はリ、ツク(抒情詩)に取つては、大に利益ミ成つたに違ひないそれは昔風の合理的生活には正反對の位置に立つもので、合理主義に由る有終的生涯に對して

只管無限の發展を高調して已まないところに、彼等の近世的藝術の榮はあるミ云へやう。従つて又それはミかくに形式を蔑視することは免れ難い様だ。その特に誇りとする所は、觀察の堪能で、相待性に對する鑑識の鋭いところにある。

此の新浪漫的派の形式蔑視に對して、形式の念を新に高調し出した者に、ステファン・ゲオルグミいふものが出て來た。即ち人生々活の靜的儀典を、形式の高尙なる莊嚴を以て現さうとしたもので、それミ共に人格の形而上的意義なミは措いて顧みない様だ。これは又啓蒙時代から來たところの自由奔放なる遣り方には、反對に立たうとするので、當然だらう。夫は客觀主義を一氣呵成的に驅逐しやうとするもので、近世的科學的合理主義を拒否せんとするものである。即ち最高者は只是れ緊張したる精神だミいふ議論で、之がその創作の中心ミ成つてゐる。従つて又宗教なミも餘りに冷靜なのは嫌つて、昔のエピキュラス派で唱へてゐた様に、友情の教義を立て、愛を極端に高調して熱狂に上せたところに、人生の眞價値を置かうとした。併しゲオルグ一派はまた藝術に於て一個の新機軸を出して、所謂モニユメンタリティーに對する要求を完遂するこをしないのは、矢張り浪漫的たるこを終に脱し得ないミ謂はう。それが一步

を進めて後期印象派から一層強い運動性で表現性を習ひ來つた時に、始めて獨逸將來の藝術界に於ける最美の什物となり云はれてゐる。それにしても詩界にはまだ後期印象派の起る迄には至らず、前途遠い事かも知れない。

尙ほ此の外に一個の別派を擧ぐれば、夫のホッフマンタールの如きは、自ら獨立の旗幟を翻したもので絶對的に欲求し渴望して己まない云ふ型式を代表して居る。或はこれなきに後期印象派の萌芽はあり見ても好いかも知らない。將又メテリンクは素より獨逸人ではないが、兎に角神祕的な極で、最高の思想を極々簡單なる人物の無意識的な一瞬の下に置くのは、太だ奇抜である。概言すれば今日は抒情詩も亦音樂同様に、漸く固有の制限を塗抹して、音樂は只響鳴の空虚なものたらんごする如く、詩も亦只言語の遊戯たらんごする傾向が見えるのは、早く後期印象派流の流弊徒に無限に憧憬する様なものだご非難するものもある様だ。

ごにかく現今は抒情詩のみ獨り榮えるのは、矢張りそれが浪漫的な自由感情ご相伴うて發展したのに由らう。之れに反してエポス即ち叙事詩の方はごんご振はない。これは元來一個の勇士の運命を詠歎するので、一定の世界圖の基礎の上に立つて、其の生涯を形容せんごするもの

である。然かも今日の看方は相待主義であり、一個人を常に不斷變化適應の關係に置いて觀んごするもので、勇士主義なご謂ふものは殆ご出來難い。將又之れご同じ理由で、印象主義は小説には満足を與へるが、稗史には一向不向であるごも云へる。戯曲にも亦さうで、新藝術ごして得た所は極めて少い様だ。それご云ふのも凡そ悲劇は、確に人物の形而上學的意義を認めずしては出來ないからである。夫のイブセンの文體なごも、その社會問題の解決手段ご同じく、一種の形式的主觀的唯心主義たるに違はない。即ちそれは一言すれば、何事も自身に取つて忠實たるごごを以て、最高しごしてゐるので、彼の劇中に見はるゝ種々の人物も、皆畢竟は此の抽象的徹底主義を代表させてゐるに過ぎなからう。その他近世の戯曲ご云へばハルトマンや、ブーデルマンの様に社會政策上の目的からする自然主義的な境遇描寫が多く、然らずんば一種の抒情詩的整調を主ごするものであるらしい。即ちそれは又大抵一種の浪漫的たるに止つてゐる。只夫の喜劇は或は寧ろ印象派流に刹那の人生味を寫すに適しはせずやごも思はれるが、何はごもあれ戯曲は將來は一方には新に古典的なものゝ復興を望むごご太だ切なきごも云ふが、自分は却て其處に何か又後期印象派的に組立てられたものの出現を可能ごせざるを得ない様な氣

がしてならない。この一段は前掲の英國劇壇の前途に就いて縷述したところを参照して貰ひたい。勿論此處に後期印象派を謂ふのは、該名辭を最廣義に看んことを求めてのことで、それは例の立體派や未來派も亦含まれたものにして欲しい。民衆的勞働國家の民衆は到底古典的なものでは満足すまい。

八

獨逸の事を言ひたれば、佛蘭西の事も亦言はずは措けなからう。抑々佛蘭西は實に浪漫的派の發祥地とも謂ふべきところで、シャトーブリアンやラマルチエを始め、ユーゴーもカヂユーもゴッテエも實に千紫萬紅、一概に律するところは出来なからう。然かも前世紀の末季に及んでは、之れに反抗して新に崛起するものがあつた。それはバルナシアン派で、或は高踏派なごも譯してゐるが、未だ悉く當れりごしない。前掲のゴッテエなごもこれに加へる人もあるがごんなものだらう。ごにかくルコント・ヅリールをその代表者ごしやう。それは浪漫的派の抒情主義に對立したもので、随分自由放縱なごころもないではないが、追に其處には一種の形式の尊重があつて、これを神聖視し、未だ會て疎略にしないごころに、その特色はあ

らう。即ちそれは不受不感を標榜して冷靜を持し、徐に分析して、自然並に人生に對して明瞭なる印象を得やうごしてゐる。即ちその詩は宛も繪畫の様に、絢爛たるものである。併しそれで以て只單に表面上の形式美を以て満足してゐるごは謂へない。否其底には深く近世的愁思のやるせなき暗流があるごは掩ひ難い。或は獨逸のゲオルゲなごに匹敵しやう。若し夫れこのバルナシアン派を以て自然主義に對比するは當を得ない。自然主義は別に小説方面に於てゾラやモーパッサン等の徹底なものがあつて、それは矢張り浪漫的たるごは喋々を待たなからう。

然り而して此のバルナシアン派に對して敵持したものは何かご云はゞ、それは象徴派だご答へられる。バルナシアン派の詩が繪畫に比すべくんば、象徴派のは音樂である。従つてそれは又形式よりも暗示的であり、奮起的なるごころに特色はあるごする。即ち分析を逃がれた感情や情緒を音韻々律の方便で以て表現しやうご云ふので、其處には語句や文法句法乃至押韻なごは極めて自由であり、その極韻文ご散文ごの區別が動もすれば没却されさうに成つてゐるらしい。その首領は先づパウル・ヴェルレーヌを推すべきである。彼はワグネルの影響を被るごご少くないご云はれてゐるのは、或は然らん。何分熱烈な多情多感の資質で、而かもその自我の

感情を表現するに、頗る猛烈なものがあるから嶄新一頭地を抜いてゐる。その他は一々録るにいが、概して後期印象派に何さなく一道の氣脈が通じてゐる様に思はれる。

斯くて吾が國詩歌の前途に想到するときは、果して何と言つたらば好からう。想ふに漢詩は固より之れを度外に措かう。さて和歌は明治維新以來幾多の變遷を経て、頗る進歩した様にも看えんでもないが、それは到底古典派に對する新古典派のものが尙ほ主要の位置を占めてゐるに過ぎない様だし、強ひてその情調を短評すれば、或は浪漫的たり、或は高踏派的たり、乃至或は象徴的たるもあり云へやうが、民衆自然の聲としては、情緒の豊富なること遠く都々逸端歌に及ばず。又利那の印象を確に把持することに於て俳句の如く趣味津津たるものは少い。その肖似のものに川柳がある。自分は常に俳句は猶ほ吾が版畫の如きもので、従つて印象派に近いところがあり云ひたい。但し未だ後期印象派たるまでに至つたものはない様だ。それに和歌俳句孰にしても短形に過ぎて固る。これはさうしても所謂新體詩風を層一層洗練して立派なものとする外あるまい。外山矢田部井上三博士が陳吳の功は永く忘れられなからう。が何にしてもまだ頗る幼稚のものであつたことは争はれない。爾來大小諸家の盡力は皆多しやう。

然かも尙ほ未だしこの嘆は免がれ難からう。然り而して自分は吾が國の詩形が例の五七調を脱却せざる間は、眞の詩は出来まいと考へる。

若し夫れ他の小説や何かは常に海外文壇の新風潮に敏感で、創作の妙早く世界文學の中に伍して、決して耻かしからざるものも少くあるまい。翻譯紹介の効果も亦固より太だ大なりとする。即ちその前途は繪畫のそれと共に、本章陳述したところで、略ほ類推されやうではないか。偶々近時近松崇拜熱の頓に昂騰するを見ても、自分は敢てそれを除外例とはしたくない。否繪畫に於ける日本畫と洋畫との區別も、早晚その意味を一變する時が來やう。材料や手法に依然一大相違はあるにしても、畫風はやがて彼此共通となつて行くところへ行くだらうと思ふ。現に今日巴里の畫家は東洋風の墨繪を取り、色彩よりも線を主としたものを、その藥籠中の物とする傾向が現著な様で、先般東京並に大阪に於て開かれた佛蘭西新繪の展覽會には、何處さなく、その氣分が漂うてゐる様に感じられ、ラブラードの畫などは、すっかりそれであつた。従つて又追々吾が半切畫の様なものを畫いて、これ迄の様な馬鹿けた大作は、餘りしないとも聞いた。

労働界の前途

財産と職業と事業との三者は、今日の社會狀態では、經濟上の三大設営だと呼ぶのも、必ずしも不當ではないかも知らない。財産の事は上文既に略論した通りである。次に職業と謂ふのは、英語のオツキユベーションであり、ジョブであるが、併しそれは寧ろ労働と謂ふ方が更にその本質を一層明示するかと思はれる。労働はワークであるが、矢張りレーボアと呼ぶ方が一層痛切であるだらう。而して事業はビジネスであり、或は企業即ちエンタープライズも看られやう。そこで此の三大經濟的社會設営は、相互にさういふ關係を持つてゐるか、それが國家社會經濟の前途を論ずる者には、最大切な問題になつて來るらしい。若し三者相待つて歩調を共にするに云ふならば、それ迄であるが、現在實際の趨勢はさうもさう行かないで追々事がむつかしく成つて來るに云へる。蓋し財産は資本として偉大の力を逞くすることに於て、労働者には常に不平不満の種を蒔く様であり、又事業家は労働者を使役する上に於て、數

々彼此利益の衝突を見ることを免れ難いのは當然である。問題は固より決して容易に解決されやうとは考へられない。請ふ少しく順序立て、攻究して見やう。

抑々労働神聖と謂ふ事は、近世文明のいさ高い叫び聲である。カーライルは曰つた。人は苟くもその高尚なる天職を忘却して仕舞ふは馬鹿になるでなくば、現實に且つ眞面目に働く人の中には、常に希望がある。只怠惰に於てのみ永遠の失望があるのだ。斯くて労働者は各々その職業に従事して、以て自己を維持し、又その自然の從屬者を扶持して行くのである。所謂自然の從屬者とは妻子は勿論、老親や病弱不具の兄弟姉妹や、幼弱の身内だ、チャンセロル氏は書いてゐる。而してそれは人間の自然の情合、且又社會の壓迫即ち義理で、労働者の勤苦の報酬の分け前を貰はうと、近寄つて來るのだと言葉を添へてある。吾が國から言つても亦大抵そんなもので、米國人とても強ち不人情ぢや不義理ぢやと貶される譯はない。併し此の事は今後の社會では、實は更に一考を要すべきもので、チャンセロル氏の説なきは、例に依つて平凡の譏を免れないらしい。これは畢竟同氏が今尙ほ温和に因襲の儘に遣つて行かうとするから來るので、社會主義者の側なきからは、定めて多々異論があらうと思はれる。

話が少々横道に外れた様だが、何はともあれ人はその職業に従事することに由つて、多少整然たる活動を爲し、一面には世間の人々に對して、自己満足を保持することが出来る。同時に一面には又社會上に於て有効に視られる諸權利を享有し得られる様に成るのである。従つてそれは又他の財産に衣食する者は全然別で、人々銘々必ずや多少體制ある繼續的努力を要するものであるのは、やがてそれが實に労働の労働たる眞價だと言へる。斯かる次第だから古來漫に人の職業を阻碍することは、未だ曾て許されてゐない様で、現に英國では夫の千二百十五年のマグナ・カータに於て早く、人には職業を方便して生計を立つべき絶對の權利あることを承認し、従つて何か大きな罪を犯して、裁判に服した時でも、被告たる本人のワイネージ即ちその家計の諸道具を奪却する恐ある場合は、罰金を課すことを禁じてある。即ち人はその犯罪に由つて、その生命を没取し去られる迄は、常にその職業とその道具類を保有する權利があるとしたものである。尙ほこれと同様の意味で、マグナ・カータでは商人にもその犯罪如何に關せず、商品は確保して居るところは、追に民權自由の根源と言はれるのも無理はない。否更に一步を進めて、たゞへ死刑に處せられた者でも、その財産は相続人に移行してある

のは他の財産没收の酷法なきことは、同日の談でないことを見やう。斯くして此處には夙に吾儕の生活權と共に労働權は認められてゐることを多しせなければならぬ。

それ然り吾儕の生活權と労働權とは、常に天賦の人權たるばかりでなく、早く法律に由つて認定せられたものと謂へる様だが、今日は更に一步を進めて、労働萬能を主張し、労働の報酬は労働者が皆悉くこれを收めるべき筈で、所謂全取權があることを主張する論者も亦敢て少いことはない。これは凡そ一切の生産は只労働の力に由つて出来たもので、價値の本は労働に在りないのである。此の論旨の當否は暫く措くとして、さて實際は君主か地主か雇主か、首長たる者が上に居て、人々生計の方便を縦に與奪することが出来るといふ状態では、労働者は全然奴隸の境遇にあるしか見えない。詩人マッシュュー・アーノードは曾て詠じて曰はく、

“ And these all, laboring for a lord,

Eat not the fruit of their own lands,

Which is the heaviest of all plagues

To that man's mind who understands.”

そして此等の人はすべてひきりの旦那の爲に働き

彼等自身の土地から出来る果實を食べない

それは物の道理の分かる人の心に取りては

あらゆる災難の中で最も重いものである

否管にそればかりではない。賃銀もくれず、利潤もなく、徒に働くのは、實に人生の一大不幸で、自分の辛酸艱苦のを産物奪ひ去られるのは、災難の甚しいものには相違あるまいが、併し實際それよりも一層重大なのは、人々銘々の職業の道具なり商品なりを所有することを許されないことである。斯くの如きは人をして常にその身の不安に懊惱せしめ、世間の不公平を切齒扼腕せしめるものでなくて、何であらう。是れ實に近世社會主義の起り來つた主要なる原因である。

然り尋常一般の經濟上の意義を以てしては、彼等賃銀稼ぎ人にては、各々彼等自身の手の果實を食つてゐる云へやうが、それも固より果實の全部でない場合が多く、それはそれにしても彼等は生産の道具をも所有せなければ、その産物をも所有せない者で、何時迄も主人持であ

り隷屬者であり、今日の用語を以てすれば、何時鹹首せられるか知れず、お拂ひ箱になるか分らず、年中宿しの日雇人、旅稼人同様で、眞に萍艸の根なし草である。法律上より言へば、彼等は富人の施して呉れる食卓に跪づく乞巧兒に過ぎず、道具も品物も皆悉く富人の掌中にある譯である。只實際その雇主の事業家中には大金を借つて、際ぎい運轉をし、日夜高利に責められて苦んでゐる者が少くないこと、或は寧ろ氣樂を謂つて好いかも知れない。而して其處には又追々ミ労働組合ミか機械の差押ミか、賃銀支拂法ミか、労働者報酬條規ミか、色々労働者保護の方法も講じられてゐることは、事實である。併しそれがまだ十分満足なものでないことも承知して置かなければならぬ。

二

以上は主として地主ミか雇主ミかの労働者に対する威壓に就いて云つたのであるが、その外に尙又彼等に反對な威力を逞しくするものは、色々ある。就中主なるもの、一つは、今日最廣く行はる、利潤本位の事業制度である。資本主義的産業制度を謂ふのはそれである。それは或は大工場にしろ、或は鑛山或は農園何にしても、その管理取締に當る者が相應に利潤を擧げる

見込のある時のみ、業務を運爲して行き、若し一朝不景氣なるに、全組織を忽然停止せんことをここである。而してその場合は常に労働者の賃銀を低くするばかりでなく、實に勝手に罷免させて仕舞ふのである。是れは今日現に大戰後の吾が經濟界の實狀で、頗る悲惨を謂はなければならぬ。將又色々不利益な事由を算へて見るに、季節もあり天候もあり流行の變遷もある夫の所謂トレード・サークル即ち景氣不景氣の循環する週期率の如きも、亦固より此の中の最も有力なものかも知れない。然り而して今や一面は勢力を省くべき機械や管理方法の續々新に發明工夫せらるゝあり、又一面には法律規則の干涉で折角能率を高め様にして、却て邪魔になることも往々にあるから困る。

但し労働者が斯んな風に地主や雇主なきの下に使役せられ、專業家の營利の爲に左右せられる様になつたのも、固より一朝一夕の事ではなく、幾多の階段を經過して、變遷沿革の極此に至つたもので、それは古今東西諸方の労働發達史を調べて見れば明である。想ふに吾儕人類の祖先はチンパンジーなきの類人猿に髣髴たるものであつたらう。勿論其處には早く自ら人獸の間に一大懸隔は存してゐたらうが、とにかく吾儕人類の祖先が哺乳動物であつたことは、解剖

生理の上より着々證明される様だ。然り而して哺乳獸はすべて四足獸であるとするに、吾儕人類の祖先も亦四足獸であつたことは争へない。然らば其處に如何にして手が發達して來たかといふ問題になるが、それは元來樹上生活を爲してゐたので、それに順應する爲に、前肢がやがて手に成つたのだと解せられる。而してそれと共に人類がその胴を垂直にして歩行する様に成り行いたのは、當然の順序で、斯くして道具の發明以前には手は登攀機關であつた様だが、文明の進歩と共に手は次第に把握機關に成り、足は全然移動機關に成つて仕舞つたのである。

右陳べた様に手の發達は吾儕人類をして著く他の諸動物より優越な者にしたが、人類の優越性は固よりそればかりでない。一方には言語の發達あり、他方には道具の發達があつて、終に萬物の靈長たる地位を占める様に成つたのである。併し其處には一つの大問題が伏在してゐるそれは外でもない、何故に吾儕人類ばかりが、獨り爾く卓抜したのかと云ふことである。然り言語の萌芽は早く下等動物中に於て求められないことはしない。それは既に多數群居するに方つては、一定の意志傳達方便が必要になつて來ることは當然である。ガルネー氏はゴリラやチンパンジーの言葉は大概二十聲から出來て居ると云ひ、又ヂュボン氏は鶏や鳩には十二種、犬に

は十五種、牛羊には二十二種の聲がある云つてゐるが、それと共にドルセイ氏は又下等人種の語彙は大凡三百を出ない云つてゐるのを見るに、思半に過ぎやうではないか。將又道具に就いて看ても、猿には早く一種の石器木器時代とも謂ふべきものがあつたことは争い難いころで、只彼等は自然の提供する石や木の枝をその儘に使用したのが、人類は追々これに工夫を施して、變化し調製する様に成つたといふ差異がある丈けだらう。

然り而して此等の道具製作に際して、偶々火が發明される様に成つたので、其處に一大進歩を見た譯だが、實際點火及び火の維持には、多大の注意を複雑な仕事を要した事だらう。勿論最初はそれは決して温熱の爲でもなく、煮沸はまだ知らず行はず、専ら照明の用に供したものと想はれるが、何れにしても手の發達を謂ひ、言語の發達を謂ひ、道具の製作を、火の發明を此等は皆吾儕人類の祖先が、偶々樹上の生活より飛び下つて、地上に生活する様に成つてから後の事だと思われやう。これは最初は眞に偶然の出來事で、現に猿猴も亦既に早く食物を搜索し涉獵するが爲には、時々地上に飛び下りたこともないではない。然かもその永く地上に止る様になつたのは、樹上生活が單調なものと、何もなくそれが局限せられてゐるのを面白く思はなく

なつた爲ではあるまいか。勿論樹上生活は極めて安全で危険が少く、自ら安逸を食るに適してゐるが、地上はさうは行かない。境遇の無限に複雑なもの共に、之れに順應すべく常に奮闘して已まず、諸能力を愈々發達せしめる様になつた。此の新境涯に入つて、二つの武器は一は手即ち道具の道具であり、一は群の團結力であつたことは注意を要する。但しその時は固より彼等は皆各々道具を有し、土地は公有であつて私物でなく、その辛勞の産物は銘々之れを享有してゐるので、天賦人權は自由に行使せられてゐたこと謂へやう。

然かも人間の勞働は孤々單獨では、その力は太だ弱い。それが他に比類のない力を得る様に成るのは、個々の人々相協力するからで、これは群居の一步を進めたものであり、其處に社會化が行はれるのである。斯くして勞働は一面には愈々集約的なると共に、一面には愈々廣大なる範圍に擴張して行く様に成つた。尙且つ協力はやがて分業或は分化を生ずることによつて勞働の組織が成立するもの、分業の理由は固より個々の人々の心身能力の差異にも由らうが又周圍の事情の變化錯雜極りなきにも由るものが多い。而してその組織を十分に甘く運営して行かうとすれば、指揮者あり命令者あり、優秀自ら相次第して、順從隷屬する様に成るのは

當然の事と謂へる。斯くして労働組織にはその大小即ち人数と、その結合の種類と、追々相異りたる新型式を生じ、終に今日に至つた譯で、此の事はゾムバルト氏の『社會主義と社會運動』（一九二〇年第九版）やミユラーリヤ氏の『文化の諸相と進歩の方針』（一九二二年）などで各々詳細に研究されてゐる。

三

即ち古今の労働組織の發達を通觀するに、其處には次第々々に種々の新要素が附加し來つた様で、最初は同族組合、第二は家族的家政、第三は外部的商業交通、第四は主君的大家政、第五は自由なる小手工業、第六は資本的企業で、それに大商業と、工業的大營業との別がある。試に之れを今日歐米の天地に跋扈跳梁して、遠く四海を睥睨してゐるチユートニック人種の上に就いて看やう。抑々民族大移轉前のチユートニック人種中にも、早く同族結合は存立してゐた様で、彼等は土地を私有することを知らず、年々抽籤に由つて新に土地を分配し、原始的共產主義で遣つてゐたらしい。而して土地の分配は平等均一を保つて違はなかつた。それと共に家族的家政を行つて生計を立て、行つたが、それは非常に質素なもので、只自家の需用を充たす

に過ぎなかつた。但し其處には夙に性的分業があつて、男子は遊獵と牧畜と家屋の建築とを務め、女子は老人并に羸弱者を相手に、農耕に従事し、又機械をもその業とした。斯かりしかば外的取引はまだ極めて幼稚の状態に在り。交換用具としては家畜を用いた様で、貨幣は只羅馬人の取引上にのみ用ひた云はてれ居る。尤も早く其處にも主君制の影は臘氣ながら認むるに難くなかつた云へる。

然り而して民族大移轉後に於て、右の同族制度は頓に衰亡して、主君的組織が表はれて來たのである。乃ち社會には逸早く武士と農民との二つの身分が分化して出來た。武士は戦争を職業とするもので、最初は王侯の身邊を守り、隸屬的であつたが、やがて自由を得て貴族と成つた。それと共に平民は全然從屬的位置に陥り、世襲的に君民關係を保ち、各々主人の賦役地内にあつて、土地に束縛せられてゐた。その賦役地には莊園あり、地主領あり、寺院領も亦やがて出來た。而して彼等は男子は羊飼・豚飼・農夫・獵夫・鍛冶屋等に分化し、女子は又各々衣服を作り、麥酒を醸し、穀物を挽くなごの事を分擔した。いづれにしても勤勞を義務とし、その産物を貢物とせなければならぬ。斯くて彼等は奴隸でないまでもが、農奴と稱されてゐたの

は、實に境涯相應と謂へる。尤も追々は手職工や技術師の中には、早く完全の自由を得たものもあつた様だが、大抵は皆隷屬的であつたこと謂つて然るべしだ。

それが時勢一變して中世紀になると、都市經濟も成り變つたところに注意を要しやう。勿論都市は固より古代からあつた。それは大抵戰時の役に立つたもので、城砦の中には田舎民衆が敵を避けて、隱家を求めたものである。城下街はそれである。然るに今や中世紀の都市は大にその趣を異にし、最初から遙に自由の性質を帯びてゐたもので、貴族や大地主は銘々自分の賦役地内に居を構へて、都市には居なかつたので、其處には自ら自由なる市民階級が擡頭し出した。これやがて今日のブルジョアなる者の初である。それは貴族の支配を脱して漸く新紀元を開き、威壓の代に萬事平和と自由を指導原理とする様になつた。其處には商業も交通もが安全に行はれる様に成り行き、在來田舎に居て賦役地の主人に隷屬し使用された居た手工業者も漸く逃れて來集し、勞働力はその數を増すと共に、益々分化し、底止するところを知らなんだ而して彼等はツンフト或はギルドなる同業組合を組織し初めたが、それは最初は單に相互の保護に過ぎなかつたけれども、後には市政の參與權を得る様になつた。即ち中世紀は概して手工

業經濟組織の時代と謂はれる。

但し當時又都市に於て手工業の外に、一つの新しい經濟組織が萌芽した。それが所謂資本主義的産業である。蓋し是れは古代も同様に、此處でも亦國際的交通が開け商業が盛になつたからで、十字軍の結果として、東洋が知られてから頓に企業心が鼓舞されたのである。即ち伊太利の諸都市では第十四世紀に於て、早く既に資本主義的特徴が見えてゐるが、ついで南獨逸諸都市でも、第十五世紀には資本主義的大商業の地盤が据えられた。而して未だ幾ばくならず歐洲各國へ行き渡つて、其處に營には商業ばかりでなく、鑛山業に着手し、眞鍮製造を始め、製銅製鐵の工場が起され、尙且つ印刷所・製紙所・硝子製造所・鏡製造所・絹製造所なども相踵いで立てられた様である。併し概言すれば工場並に製造場は當時はまだ依然家内工業の時代であつて、資本主義は暫く他の方向に運んでゐたこと謂へる。

之れを要するに資本主義的企業の發達は、太だ遅緩であつたこと見える。然かも今茲に突然それが勃起して、やがて驚天動地の勢を逞しくする様に成つたのは、大なる勞働機械の發明で、即ち蒸汽が發明せられ使用せられ出してがらの事である。是れ實に有史以來産業上の一大革命

を惹起したもので、それより頓に資本主義の隆盛期に入つたのである。英國では第十八世紀に於て早くこれを見、獨逸では後れて第十九世紀後の事とする。獨逸には第十九世紀末に尙ほ五十萬の家内工業者はあつた云はれてゐる。斯くて資本主義的企業は苟くも大規模に經營して相當の利潤あるものならば、何でも彼でも一切皆その掌握するところとせんし、紡績・織物・製革・製粉・製帽・製本・製煉・製陶・乃至手套製造の諸工業は、その侵略に逢ひ、早幾多の労働者を失業餓死に瀕せしめた様だが、やがて全商業界全交通界をも征服し、航海・鐵道・郵便・鑛山・皆之れに支配せられ、到處大問屋大商店に集中して、その支店は東西南北到處に網を張り、手工業の大多數は只々その驅使に委ねる様に成つた。是れが歐米の現狀で、特に米國を最盛大と見る。

四

以上陳べ來りたる労働發達の歴史を一瞥した者は、誰でも、本章劈頭掲げ出した労働者の苦痛苦情も亦遠く淵源してゐるところを知るに難くあるまい。然り而して吾儕人類の文化生活は又實に斯くして發達し來つたのであることも承知せなければならぬ。例へば事業家の只營利を

目的として、人情を顧みないのは、固より惡いに違ひないが、併し吾儕の文化が事業家に負ふところも亦決して少いことしない。否之れを經濟上より觀察しても、物貨の價值は此等事業家によつて作り出されたところも却々多からう。素より労働は事物の價值の本であることは勿論だが、さりして市場價值は到底需用によつて生ずるものだから、事業家の其の間に盡くした功績も認めなければなるまい。特に此等の冒險的事業家は、幾多の危難を冒して、勇往邁進し由つて以て新發見新發明を勧誘し、獎勵し、刺戟し、鞭撻した効力は偉大なものがある。即ち彼等は固より己の懐を肥すことにのみ汲々してゐるが、然かもその餘澤は延いて廣く一般をも均霑する様にならぬことはしない。そこで世人も自らその慾の貪婪なる振舞を大目に看過した様な譯で、一言以てこれを蔽へば、一面は經濟の上から、又一面は進歩の上から、之れを寛恕するのだと云ひ得べく、尙且つ總じて事業は競争の極めて激烈なもので、眞に優勝劣敗の法則は毫も假すところがない。勿論それには天運もあり、一攫千金も固より稀有としないが、若し一敗地に塗るに成るに、それは實に悲惨極まるものらしい。畢竟一種の別才で、碌々者の出來ることではない。實際國家社會主義なきは一場の夢である。妄想である。一時の變態として

はいざ知らず、社會主義が永久の國家を作る様には、世は進み行きつゝは見えない。蓋し若し萬一々切の事業を國家の掌中に收めて仕舞ふことになるにしても、其處には政府としては、自由の餘地は極めて乏しいとは、猶ほ政治方面に於て見るところと同様であらう。普遍的公共討議の問題として自由の論究を許す場合は案外少く、只營々汲々として、而かも格段甘くは行くまいだらうと思はれる。されば事業家の人格性行には、無論追々一大改良を加ふることを必要とするが、然かも文明社會は今後も永く事業家を専門主義の精神の權化として、之れを厚遇し、由つて以て一般國民の富を増殖することを圖るに極つてゐる。例のチャンセロール氏は言つてゐる。至極穩健の説を謂はう。尙ほ最近出來た米人ウォルカー氏の『資本主義と過激主義』（一九一九年）の如きは只是れ一小冊子だが、資本主義の有利有効なる所以を詳述し、他の過激主義は勿論、國家社會主義をも駁撃することに、到矣盡矣と謂へやう。

斯くは言ふものから、資本主義は今漸く晩季に入りつゝある様にも見える。此の點に於て吾が日本の社會經濟の狀態は、從來遙に歐米のそれに後れてゐたことは争えない。勿論それは各國自ら事情を異にするから一概に言へず。日本上下三千年の歴史を、歐洲の古代中世並に近

世に配當して見ることも亦、必ずしも出來ない事はなく、自分も是れ迄そんな風に考へて見たことも數々あつたが、併し更に熟考して見るに、彼は新古幾多民族の興亡相踵いだもので、日本の様に古來一大民族が永く續いたものではない。従つて日本民族の經濟史を云々せんとする場合には、寧ろこれを右述べたチュートニック民族のそれに對較する方が至當かと思はれんでもない。即ち神武東征より以後數代を経て、日本武尊東征に至る頃までは、これを大和民族の一大移動期と看做し、それから大化革新頃までは、たゞへ原始的共同的共產主義の時代は、或は無かつたにしても、口分田に多少の面影はある様だし、家族的家政で、男女相互に分化して各々その業に従つてゐたことは、男には弭調、女には手末調なる掟のあるのでも知れる。弭調はユハズノミツキと訓じ、弭は弓末とあれば、即ち獵具なり。手末調はタナスエノミツギと訓ず。手工なり。農耕も亦その中に加へられたのであらう。外部との取引は固より毫も振はず。但し既に多少は定期の市立らしきものはあつたことも見られる。物々交換で、錢貨は未だなかつた様だ。只後には稀に大陸より輸入したるものもあつたが。大化革新は家族的家政に代へて君主的家政の營まるゝ始である。尤もこれより先き崇神天皇乃至成務天皇の頃にも、早く君主

的家政は萌してゐたことは争はれない。然り而して君主的大家政は大寶令に由つて、劃期的に整頓せられた様で、奈良朝の隆盛を現し、やがて平安遷都後も亦引續いて、愈々發展しつゝあつた。莊園や社寺領は到處に益々増加して、その弊に堪へざるものがあつた。

斯くて源頼朝別に覇府を開いたが、それは公家と武家の層一層錯綜して繁雜に成つた丈けで、所謂君主の大家政たるに違はない。強いて言はば、神聖羅馬帝國に於て皇帝と法皇とが對立してゐたのにも較べられやう。南北朝より足利時代乃至織豊二氏の時を、一括して中世紀とする。それは手工業の盛時で、而かもその間には早く海外との取引を生じ、例へば堺港の如き商業中心地も出來た次第である。慶元偃武以後を近世紀とするは無理あるまい。手工業は依然繼續して、却て益々組織的となりつゝあつたが、外國貿易は鎖國令で屏息したにもせよ、其處には又追々資本主義的商業の大規模に行はれ出した事も認むるに難くなからう。現に三井・鴻池住友なき諸富豪は此の好形勢の下に漸く成長し來つたのである。農業の側にも昔の領家領主以外に、漸く大地主が崛起し出した。但し工業の方は依然家内工業で、大工場風のものはなく、只所々に鑛山の稍々大仕掛なるものがあつたに過ぎなからう。斯くて明治維新を佛蘭西大革命

に較べるに、明治時代は即ち彼の國の第十九世紀で、而して大正時代はやがて第二十世紀に當て、見やう。さすれば目下蒸汽の使用に由る大工業の勃興より、資本主義頓に隆盛を極め、やがて其處には又労働問題の伴生した工合も、略ほ會得せられやうではないか。

五

然り内外共に今日は實に資本主義的企業の最隆盛な時期と謂へる。然かも又他の一面より觀察すれば、右述べた通りそれは早く晩期に入つたもので、この次ぎには復々一新時代が現はれ來るに相違なからう。否其處には早く已にその兆候は明に見えてゐるに云へる。即ち之れを内にしては、家族的家政は愈々衰滅して行くに共に、之れを外にしては、外部取引は愈々手廣に成り、萬事國際的に成りつゝある。而して其處に新時代の兆候としては、又諸經營の漸く社會化し行くことが始つたことには、特に注意を要しやう。所謂社會化に二面ある。一面は國家經營の漸く進むことで、それは昔に國家ばかりでなく、その中には地方自治團體の仕事をも含めて見やう。又一面は組合經營の盛に行はるゝことで、それには消費本位のもの、生産本位のものがある。此の社會化の進行といふ事は、労働問題の前途如何を論定するに、最大切の要

素である。蓋し國家經營の事も、その組織や規模は猶ほ資本主義的大企業の如きものみ看られる。然かもそれは個人の利益の爲にするのではなく、公共の利益の爲にするのだといふ、根本的大相異のあることを、輕々看過してはならない。即ち一方には或は官僚的で機敏を缺くもの非難もあらうが、その代りに又投機的私利を營むなさいふとはない筈である。斯くて近代國家は既に造幣・關稅・租稅・山林なきを自ら管理し、普通教育も義務的のものは悉くその掌中に收め、更に各般の保險業をも、次第々々に大仕掛に組織し、労働者を工場監督法に由つて保護し道路・運河・橋梁は勿論、市街鐵道・瓦斯・水道・下水を經營し、病院・孤兒院・託兒所・癲狂院・養老院・博物館・圖書館等を立て、自己の船渠に於て造船もし、煙草・食鹽乃至酒類を製造して專賣するもあり、鑛山を管理するところも少からず。特に郵便・鐵道・電信・電話の運輸交通機關の如きは、何處でも大概は國家經營の最大組織と謂へやう。尤もそれも米國邊では、今尙ほ資本家の私營の個所も少くない様であるとは、周刊の事で、或はトラストとかカルテルとかシンジケートとかリーグとか色々あるが、經濟機關の全部を私人に獨占せしめることは、太だ危險で、早晚國家は公共利益の爲に之れに着手し干渉しなければならぬとは、夙に唱へられてゐる。

るところである。即ちやがて一步を進めたらば、所謂國家社會主義が其處に行はれる様に成ることは、必ずしも想像に難くないだらう。日本亦現に然りて謂へる。

將又組合經營の方に就いて看ても、是れ亦加入者の共同利益を目的とするもので、一人或は數人の資本主義的事業家の私利を目的として經營するものでない。否それは營利の會社組織とは、固より全然別物であることは、喋々を待たまい。然かもその國家組織と根本的に相違するところは、國家組織は上から下へ向ひ、組合組織は下から上に向ひ行くにある。組合は素是れ自助の精神に胚胎してゐることは、屹度注意を要する。然り而して組合の目的は、主として他の資本主義的企業の獨占的貪婪の所爲に對抗し、これに凌駕せんとするにあつて、消費組合は確に製造家並に大小商人の暴利を征服するに有効であることは、疑ひなく、現に英國并に蘇格蘭を本家本元とし、白耳義始め獨逸なきに於ても、その成績早く大に見るべきものがある様だ。然り而して生産組合の方では又特に丁抹の農業集合主義が、無比の好模範と仰がれてゐる。バターやチーズの製造、養鶏と鶏卵の輸出、并に屠殺ミハムやベーコンの製造なきで、自分も先年逐一仔細に視察して、吃驚したところである。詳細は拙著『洋行土産談』(大正元年)を看て呉れ

給へ。南濠洲・ニュージランド邊でも亦早くから略ほ同様だき聞いた。工業上の生産組合が愈々大規模にならうことは、一々贅辯を待たまい。斯くてその極は一切の生産事業を擧げて寧ろ組合の手に入れやうとする様に成るのも、必ずしも無理からぬ事かも知れない。只我が國では一時さしも隆盛に見えた組合も、目下は一寸下火の態なのは、さうしたものか。

何はともあれ斯様な次第で、一面國家社會主義一面労働組合萬能の過激主義との間には、業に已に納鑿相容れざるものがあることは明瞭である。更に詳に論じて行くに、産業の將來は何れの國を問はず、依然労働協調主義に由つて遣つて行くか、國家社會主義に由つて遣つて行くか、組合主義に由つて行くか、それとも労働者萬能の過激主義に由つて遣つて行くかの外はなからう。労働協調主義はソリダリティーの思想を基礎として立つもので、聯帶責任であり、酬恩を先にした正義を本とする。國家社會主義はソシヤリスチック即ち社會主義であると共に、ソサイエチック即ち全體主義の面影が存してゐる。組合は溫和だが、過激主義に至つては極端で、やがて共產主義ともなり、無政府主義ともなることを免れ難い。これは成る程危険千萬であらう。現にI.W.W.の蛇蝎視せられるのは無理はあるまいだらう。

六

此に於て自分は又一寸アントン・メンガーの言ふところを瞥見しやう。即ち彼は國家の型式を神國即ち宗教的・俗國即ち人間國に大別し、而して後者には實に個人主義的・社會主義的・共產主義的の三大別があるとしてゐる。所謂個人主義的國家とは、支配し命令する國家で勢力國家と呼ばれ、經濟的活動が主として個人に由つて營まれること云ふが、その實は強者の個人的利益が、殆ど専ら國家的活動の對象を爲してゐるのである。今日存立せる諸國家は概ね然りこと云へる。それは只支配者の勢力地位を支持し擴張することこそが主要の目的であつた。之れに反して社會主義的國家は、労働する民衆の國家で、民衆的労働國家と謂つべく、それは固より各個人の生存・維持・發達・繁殖を計ることこそ國家重要な目的とするので、それには財産權の主体を個人にあらず、大なる團體にありしものが、社會組織の本質である。然かも消費品、享樂物は、その爲されたる労働の分量に準じ、或は又その他色々の因子を斟酌して、社會各員の間に不平等に分配されることを當然とする。但し從來見る如き所有本位の經濟的境遇の差違は、土地及び資本の所有權の消滅と共に、當然廢止すべきものだこと云つてゐる。然り而して共產主

義の國家はその上に更に一步を進めて消費品も享樂物も皆悉く團員の間は一切平等に分配せられなければならぬと主張する。但しこれは人間天賦自然の差違の爲に、素より決して十分に遂行せらるべきものでないとしてゐる。

是れに由つて此れを觀るに、メンガー氏の意見は矢張り一種の國家社會主義の様ではあるが併し又その生産消費の指導に就いては、尙ほ考察を要するものがある。即ちその民衆的勞働國家に於て地方團體とする、人口平均略ほ二千位の一單位にあつては、別に中間物なく直接に生産消費の指導に當るが、近代生活必然の現象と謂つべき甚大なる都市の場合では、經濟的秩序は頗る廣汎であり複雑であるから、勢個人と地方團體との間に中間物の介在する様にならう。それには先づ大都市を適宜區劃し、それと共に又該都市内の同職に屬する者は合同して勞働者集團即ち勞働組合を作り、區々勞働集團を行政制度と觀るべしとする。尤も財産及び經濟活動の主體は、常に地方團體であれば、團員たる民衆は地方團體に對して、生存權を有するもので、勞働集團に向つて、直接にその勞働收益の分配を要求することは許されない。勞働集團と交渉するものは、地方團體であるとする。

斯くてメンガー氏の所謂勞働集團は、公法的性質のもので、地方團體の命令に由つて、設立せられ或は解散せらるゝもので、頗る外律的であるところは、フリーエヤルイ・プランや乃至ラツサーレなきの勞働組合とは全然別である。それは國家社會主義を論理的に推行すればさうなるべきが當然かも知れない。併し實際に於てそんな工合にして、甘く治つて行くか否うか、ただ怪しい様だ。此の事は英米諸國の勞働組合もさることながら、特に戰前獨逸國に於ける勞働組合の發達を見るに、如何にも猛勢の様で、恐ろしくなるだらう。ゾムバルト氏の『勞働組合運動の理論と歴史』(森戸辰男氏の譯本、大原社會問題研究所より出づ)は素、千九百十年の著述で、大戰前のものではあるが、一個の好參考書であらう。何はともあれ何處に於ても、勞働組合は外部より製造せらるべきものではなく、内部より自ら發生するもので、而してその勢力は漸く強大に、何時迄もそれを承認しないなさいふことは、到底行はれ難いに極つてゐるやう。その國家との關係如何は、前途の一大難關と謂へる。

但し英國は勿論、佛蘭西に於ても勞働者は目下益々赤化しつゝ、ありこは謂へない様だ。然りその勞働總同盟(C.G.T.)は右翼と左翼と終に分裂して、其處に二個の聯合を形成し、右翼派

は舊名を襲ふと共に、左翼派は別に新に統一労働總同盟(C.G.T.U.)を稱してゐるが、この左翼も亦赤色労働組合のインターナショナルには反對であることに注意せなければならぬ。而してその一類たる革命的サンヂカリスト委員會(C.S.R.)も亦復昔日の猛烈な意氣込は見ないらしい。然り而して他の獨逸側に於ても亦共產黨は今日の現状では、日に日にその勢力を失墜しつつあることは争ひ難い。南部並に中部の諸邦に於て、到處極左黨内閣は失敗した様で、獨逸今日の中堅は、穩和社會黨にあるを謂へやう。右黨亦却々悔り難いものがある様だが、さりして帝政の復辟運動なきは一部人士の夢想に過ぎない。然かも今度の獨逸新憲法の改正で、聯邦各州必ずしも共和政體を必要としなくなり、バイエルンは君主制を建てたる様に成つたことは、大に注意に値する。

因にザ・インターナショナルの事を一言したい。これは萬國労働總同盟の意味で、固より極めて過激なものである。その起原は千八百六十四年に英京倫敦で起つたので、カール・マルクス親しく牛耳を執り、宣言書并に綱領を起草したが、翌々六十六年にゼネヴァの大會に於て、最後の裁可を見たのである。その主要なる目的は、資本主義的産業制度を破壊し、ブルジョア級の

傲慢なる鼻を挫ぎ、その代に共產主義を基こせる労働者の國家を建設しやうと云ふらしい。それは勿論國々の事情なきは斟酌する必要はないとする。恐ろしい事だ。併しこれは永續せず。千八百七十二年には既に二つに分裂して、一つは主として佛蘭西・伊太利並に西班牙の労働者を本位こせる聯盟派で、一つは依然マルクスの配下にある獨逸の社會民衆黨を成り、此處に所謂第一インターナショナルは瓦解したつたのである。爾來後者の中央委員は一時その中樞の位置を、海を踰へて紐育に移したが、千八百八十九年以來二年乃至三年目毎に定期的に、萬國労働者會議を開會することとなり、千九百一年に社會主義インターナショナルの常設委員をブリュッセルに置き、千九百四年にアムステルダムに移した。これが所謂第二インターナショナルなるものであるが、それは千九百十四年に獨逸に於ける社會民衆黨の失敗に由つて、頓に勢威を墮した様である。而して今や戦後に於て、露西亞中心に新に第三インターナショナルが起りつつある様だ。近く千九百二十二年の秋にもモスコウに於て第四回の大會が開かれたらしい。或は曰はく第一次のインターナショナルは議論を主とし、第二次のものは宣傳を主とした。孰も時機相應と謂へる。第三次のものは、又自ら別ならざるべからずと、果して如何なる事を爲

さんごするか測り難い。所謂直接行動は大に警戒せずんばあるべからずごは、歐米諸文明國の一般に唱ふるごころらしい。

これを要するに近き將來に於ては、健全なる發達を爲しつゝ、文明國家に於ては、固より過激主義や共產主義が、實際甘い工合に遣つて行けやうごは想はれない様であるのみならず、所謂國家社會主義やメンガーの民衆的勞働國家なるものさへも、その十分徹底的な實施は、尙ほ大に沮むごころがあらう。蓋し近世國家の方針がそれに髣髴たるものがある様に見えても、實際は尙ほ遙に隔絶してゐる。乃ち目下のごころは矢張り勞資協調に由る外ないだらうか？ さてそれならば第一には資本家、事業家の精神修養、人格鍛鍊に於て十分なる注意ご反省ごを求めなければならぬ。而して勞働者を理解し、尊重するごに於て、大に面目を改める必要がある。従つて勞働者の福利増進に就いては、廣義にも狹義にも、成るべく周到なる施設を要するは勿論、それ丈けでなくて、勞働代表者の産業經營上に於ける參加、並に事業收益の勞働者間への適當なる分配なごも亦、然るべく取計ふ様にならねばならなからう。勞働者の教育や人物養成の輕々看過すべからざるごも、異論はあるまい。但し今は既に道德標準は自ら一變し來

り、舊來の資本主義的教訓を以て、他を律せんごすることは、到底行はれ難いごも豫め承知して置かねばならない。階級心の自覺的振起は、文化進歩上當然の事で、何ものも強いて之れを掩蔽し壓抑するごは出來まいかご思はれる。

七

尙ほ終りに女子の事に就いて一言したい。抑々男女の關係は、その當初本來の状態は、固より決して一尊一卑宛も主従の様な風であつたごは謂へまい。最初の同族組合期に於ける家族的家政の段階では、其處には早く性的分化はあつたが、男子は戰士獵夫であり、その活動に必要な武器や道具を製するご共に、女子は小屋を守り、火を維持し、食物を調へ、子共を育てるなご、すべて面倒なる仕事を引受けて、而かも毫もその苦痛を訴へなかつたらしい。斯くして追々兩性間の仕事はそれごと専門化し行いたのである。但しそれは尙ほ雙方共にその本質に於ては全然同種同質であつて、分化はなかつたらう。然るにその後男子の方は逸早く續々分化したばかりでなく、文化の發達ご共に彼等は自家生産を辭して、社會化されつゝ、あつたに似ず、女子の方では久しき間依然不分化の儘に進んで來たご謂へる。従つて婦人問題ごも稱すべきも

のは、昔時はなかつた筈で、たゞへあつてもそれは固より全然意味が違つてゐたのである。即ち中世紀では種々の事情から、婦人の數に過剰が生じ、結婚に困難なところか、色々な事をしたが、それは決して分化は謂へない。右種々の事情は、一面には僧侶てふ巨大の群が、女子からは遠かつてゐたことである。又一面には戦争が引き續き、多數の男子を殺したつたことである。その上に當時職工組合の規則として、修業中のものは大抵他に出て家に居なかつたことも、勘定の中に入れなければならぬ。そこで此等未婚者の多數は尼寺にその隠家を求めた。其處には又純粹の尼僧ではなく、民家に来て、極少の報酬で裁縫・洗濯・紡績・機織などの家事を手傳ひ、又看護婦の様に病人の世話をするのもあつた。但し多數は下婢として各所の莊園なきに奉公したと見られる。而して十字軍以後は又娼婦を生じ、彼等は公の席にも立派に着飾つて出入し、戰場へも軍隊に伴隨して群を爲し、都市には到處青樓が殷盛を極めてゐたらしい。

右申述べたところは、固より吾が國に於ても亦略ほ同様である。娼婦並に青樓の起源は、早く平安朝の末期以前に、これを見た様ではあるが、併しその長足の進歩は鎌倉以後だ謂へや

う。尼僧は奈良朝の初に夙に諸國に國分寺と共に法華滅罪寺が置かれたので、儼として存在してゐた譯だが、その外に追々尼僧類似のものは増加したらしい。況して吾が國には蓄妾の俗が古くからあることも注意しなければならぬ。此の状態は江戸幕府を通じて又同様であつた。拙著新刊の『現代宗教と性慾』(大正十二年)は一参考書ならう。

勿論西洋では中世紀末からして、早く手工業に従事し出し、それは最初は單に妻女が、その夫や父兄の業務を手傳ふに過ぎなかつたのだが、やがて獨立して業を営む者も現れて來た。それは羊毛・麻織物を始めとして、毛皮や麵包や絞や刺繡や金絲などの手工業に従事し、而かも廉價で以て、男子と競争し掛けたので、一時は組合への加入を強制せられながら、第十三世紀頃には又早く數々組合外に放逐せられ、終に第十七世紀末には到處全然除外されて仕舞つたといふことである。此の一段は吾が國では遙に事情を異にし、此處には恐らく未だ曾て獨立の女子の手工業者はなかつたやう。組合加入なきは贅辯を要しない。但し妻女としての手傳は寧ろ一層多かつたかも知れぬ。

斯くて西洋では近代資本主義的企業の隆盛を極め、機械工業の廣く行はれるに至つて、事情

は頓に一變して、男子は早く皆家庭を辭して工場に赴き、家内工業は悉く女子の掌握するところとなつたを謂へる。然かも今は更に一步を進めて、その女子をさへ追々家庭外に誘引して已まない様である。その主なる理由は、一旦機械を用ひ蒸汽や電氣の動力に由つて運轉することゝなつては、復必ずしも男子の優越なる筋肉も誇りとするに足らず、女子亦優にこれと競争することが出来からである。加之ならず其處には又産業の革命に由る貨財の供給自ら潤澤なるに伴れて、妻女の家庭の仕事は追々閑暇を生じ行くべく、即ち外に出で、諸般の職業に於て男子の領域を蠶食し、追々これを驅逐して、得々成功に誇る者も少くなかつた。それは一つには女子は概して賃銀の低廉なるに甘んじてゐるからでもある。その極今日では女子にして、所謂高等なる自由職業に従事する者も亦敢て少くなく、一方には女子教育も日を逐うて高尚に赴き、大學の門戸も公開して、男女同權を成りつゝありとするを、將來は女子の職業分化も亦男子のそれに譲るまい。而して又男子と同じ様に社會化し行いて、終に性的分業は殆ど言ふに足らざるものゝ成ることも、想像するに難くなからう。現に米國では千九百年の國勢調査では、職業の種類總計三百三の中で、女子の一人も見えないのは、只七種丈けであるを云つたが、千

九百十年には復女子の未だ從事せない職業は、一種もないを云つて居る。吾が國も亦早晚さういふ風に成り行くことは疑あるまい。尤も現今歐洲諸國では大戰後男子すら職業を得ずして困む者が多いので、勢女子は稍々閉息の氣味であるを云ふが、それは一時の現象に過ぎないことは明であらう。否實に今度の大戦は、職業上の能力に於ては、女子決して男子の下にないといふことを證明した點が多々あるらしい。男女職業上の機會均等は當然の趨勢を謂はなければならぬ。而して又追々一步を進めてその待遇報酬に於ても、層一層多く要求して止まない様に成るのは、敢て怪むに足らなからう。拙著『書齋より主婦と女學生へ』(大正十一年文献書院)を看給へ！(最近の年報には六百七十八種の職業中、三十三種だけ除外だがある。)

戦争の前途

一

戦争が一個の社會的設営だを云ふのは、少々變に聞えるかも知らんが、若しそれを言ひ易へて軍隊が云つたならば、復誰にも異論はなからう。この軍隊を謂ひ戦争を謂ふものは、固よ

り遠い昔からもある事だが、實は近頃にも及んで頓に大規模になつた様で、吾儕の社會生活の上では、輕からざる負擔であり、文化進歩の上からは兎角邪魔物視せられ出して來た様だ。此の際に於て吾が國では變な工合で、政黨内閣が倒れ、海軍出身の一軍人によつて貴族院本位のものが出來たのは、いはゆる憲政の正道からいつたならば、決してその宜しきを得たものこそは謂へないだらう。特に目下内外共に尙武主義の評判が悪い時節に、軍人總理の内閣が組織せられるなきは、確に時代錯誤の譏を免れなからう。併しそれは只通り一邊の理窟で、實際この場合は斯うするのが、可能的最善であるらしく、特に新總理は先きに華盛頓會議の花形役者として案外に諸外國にも氣受が好いさうであり、その人が自ら當の責任者として、立派に海軍縮減の跡始末をつけるに氣張り、また陸軍の側でも前内閣の大臣たる者も意志疏通して居すはりなきなり、十分軍備縮少策を實行するに公言して居るに聞いては、別に列國の感情を損するやうのこともなく、こゝ數年間無事に治つて行くかとも想はれる。自分は今茲には素より政談をしやうといふ考は毫もないが、只新内閣が海陸兩方面の軍備縮減といふことに、多少の望を囑して、敢て斯様に申した次第である。

併しまたそれと同時に自分の平素竊に疑を懷いて居ることは、斯様に海陸軍共に軍備の縮減を斷行せんとしてゐながら、その實深く内心に立ち入つて穿鑿して見たならば、それは孰れも果して眞に平和を好愛してやつて居るのかさうか分らないといふことである。或は列強會議の懸引上、已むを得ず斯うはするもの、好戰の志は少しも變らず。一面に兵數艦數を減するに共に、一面にはそれで以て十分有効に戰へるやうに、種々工夫を回らし、無い智慧をも絞つて居るに、油断はならぬ。而してそれはまた固より獨り吾が軍閥者流ばかりでなく、他の列強も同様であり、只巧に胡麻化して、表面一時の安を偷んで居るだけで、裏面ではいろ／＼劃策するところがあつて、寧ろ經濟上の競争で大に利するところがあらうとし、遠近各地に於て吾先きに、いはゆる平和的侵略を敢てし、相互に利權の戦線を成るべく廣く擴張しやうと努力怠らないのだとするに、それは早晚衝突して、復々大戰が勃發しないとも限らない。總じて昔は戦争は頻繁にあつたやうだが、それは大概小規模のものに過ぎなかつたといへる。然るに追々戦争の度數は減じ行くに共に、その規模は頗る大きく成りつゝあるやうで、規模の大きなだけそれだけ、間隔は長くなるだらうが、一旦勃發するに、それは非常に大きな損

害を生ずることは覺悟してゐなくてはならぬ。何はともあれ吾儕人間世界から戦争の跡を絶つて仕舞ふことは、今のところでは到底望み難いといふのが、諸學者普通の意見らしいのは、大に困る事ではないか。知らず戦争終滅の方策はないかさうか。

試に座右にある統計に據つて見るに、最近五十年間に於ける大戦は、普墺戦争、普佛戦争、日清戦争、日露戦争並に歐洲大戦五回を數へる様だが、出征軍人總數敵味方を合せて、普墺の時は百六十萬人に過ぎなかつたのが、普佛戦争には三百十六萬、で、今度の大戦は千七百七十四萬の多きに上つてゐる。日清戦争は五十九萬人に過ぎないが、日露戦争は二百二十九萬人の多數である。前三つは普魯西を主とし、後の二つは日本中心と看ば、確に戦争は一回一回その規模を大にするに云へやう。

然り而して古今武器否戰闘用具の變遷を回顧するに、恐ろしくて身の毛の竈立つを覺える。それは東西いづれの國でも、昔は只杖や挺や石やで以て相闘うたに過ぎない。杖も挺も共に棍棒のこゝこである。それが稍々進んで刀槍劍戟を用ひる様になり、尙且つ早くから弓矢をも併せ用ひた。弩といふは既に一個の機械であるが、イシユミを倭訓してゐるのを見るに、その粗大

なこゝこは推測に難くない。それが一變して大砲となり短銃となつた。これは火藥の發明に伴うのは勿論だが、早く夫の玩具に見る様な小石や豆粒の鳥銃もあつたらうと思はれる。而して最近世の一大進歩としては、水雷艇の襲撃がある。尤もそれより先きに陸上には地雷火を伏せるこゝこがあり、それは古の陷穽に較べるに固より同一の談でないが、水雷艇にもその極簡畧な先蹤としては、潜水夫を用ひ舟船の底を破つた例もある。若夫れ今度の大戦には、榴彈は勿論。毒瓦斯あり、飛行船あり、飛行機あり、大タンクあり、空中より病菌を撒布し、水源より毒藥を投入するなき、凡そ悪いこゝこ事は獨逸側では皆試みられないのではない。一言すれば今や戰術は次第々々に高等數學に基づく様になりつゝあるに共に、戰法戰具は又益々科學的になり機械學的になりつゝあるに云へる。而して之れに順じて人畜の命を殞し、破壊々崩の害を生ずるこゝこは愈々多い。

現に今度の大戦は出征軍人の死亡は敵味方を通じて七百七十八萬餘、負傷は千八百二十八萬人餘を算へられてゐる。而して海軍損害も亦八十萬噸以上この事である。その他商船の被害に至つては更に大なるものあり、千二百二十四萬噸は驚くではないか。各國戰費は合計三千七

百二十億圓餘を聞いても、一寸概念を拵へることが出来ない。それは國富の三割七分五厘を消耗したのだといへば、稍々想像がつくだらうか。爾前の二大戦たる普佛戦争は、戦費約五十億圓、日露戦争亦畧ほ然りとするに、彼此比較して見るが好い。何しろ一日だけでも二億六七千萬圓になるといへば、吾が日本帝國政府の一ケ年の全歳入を擧げてしても。僅に一週間を支えるに過ぎないのである。それで以て見ても大抵見當は付かう。

戦争の間隔は、日本々位で計るに、日清戦争が明治二十七八年、日露戦争が三十七八年で、十年目であるが、それから又丁度十年目の大正三年に歐洲大戦は起り、吾が國亦やがてこれに参加した。將又獨逸中心でいふに、普佛戦争から今度大戦開始迄は、四十五年で終結迄は凡そ五十年とするに、この次の大戦は果して何時の事だらう。折角の海軍休日も唯僅に十年では少小心細い様な氣もする。

二

此に於て更に起る問題は、何故に人類は斯様に折々戦争を敢てするのであらうかといふことになる。それに就いて或る學者は戦争は又是れ一個の本能で、その人類の心底に根ざせるもの

は太だ深く、固より容易に驅逐し難いもので、いはゞ食色に亞ぐほごである。人は考へることに疲れるに話し、話すことに疲れるに闘ふやうで、西洋では議會の止まる所に戦争は起るなごといつてゐる。しかしそれで以て這の戦争本能は、固より獨り吾儕人類にのみ存するものとは云へない。從來一部の學者は、人類以外の諸動物は大概その捕食して生餌とするものとは相闘ふが、同類相戦ふことにはないと言つてゐる。併しそれは固より大間違で、諸動物も同類相争ひ相食むことは決して珍らしくはないやうだ。只それだからといつて、戦争は廣く動物通有の本能といへるかさうか。よし動物通有の本能であるにしても、それがまた吾儕人類のそのやうに猛烈であるかさうか。西洋でも尙武主義の軍人仲間では、生物學上の事由で以て、戦争の永く人類に必然的なる所以を説明せん企つる者は少くないさうだ。さうするにそれは科學的眞理だといふことで、俗耳には如何にも尤さうに聞えやう。しかしそれは實は似而非科學であつて、うづかり信憑しては困るものもあり、最近に米國メイン大學のウォーレス、クレীগミいふ人は、一番動物について研究的態度で以て、徐に觀察しやうとし、その成績を大正十年四月の『萬國倫理學雜誌』の上に公にしてゐるのを見た。

即ち同氏は只漫然と廣く色々の動物に關する斷片的知識を集めるのは駄目だとして、特に一種類を選んで、それについて仔細に觀察したので、それは鳩を代表的のものとして取つた。こいふのは鳩は随分多く戦ひもし、而かもまた常には極めて平和である。然り而してそれは今日動物界中では優勢の地位を占めてゐるもので、その數も多く、その類も多くて、非常に迅速に進歩的進化をなしつゝあるものだからこいふのである。自分共は鳩こいふも、昔は日本でも軍神たる八幡様のお使ひであつたに拘らず、今は西洋風にかぶれて、平和の使者の様に看てゐるから、この鳩を戦闘動物の代表としたのは、何だか變なやうに感じたが、研究の結果は果してさうか。

クレীগ氏は曰はく、諸動物は或は食物、或は巢栖、或は配偶など、自身に取つて最價値あるものを獲得し、またこれを持続して所有せんがためには戦ふが、その相戦ふに至るには、常にそこに一つの繩張り内にもいふべき領分があつて、その中に他から侵入せんとするものあらば、止むを得ず戦ふのである。即ちそれは大概防禦的たるに止つて、攻撃的なるはない。それこいふも諸動物は可成相互に一定の間隔を持するこいふ本能的行儀があるから、むやみには相

憚るこことはないからでもある。そのこは行雁についても知れるが、夫の猫などにはそれが著くて、従て餘り相争はないのぢやさうな。

クレীগ氏は尙ほ續けていつてゐる。曰はく諸動物の相戦ふのは全くその利益を安固にせんがため、戦争そのものゝ興味で相闘ふこいふこは殆どない。只稀にあるのは寄生的習慣のあるものゝ中に見るに過ぎない。しかし一體に諸動物中には自ら働かずして、他に寄生し而かも傲然と構へてゐるものなごは極々少い。即ち彼等諸動物の相戦ふのは、畢竟利益の衝突こいふ場合に限られる。然かもそれさへ實は彼等に早く智慧分別が相應に發達してゐたならば、それはむやみに相ひ闘はずして濟む途も十分ある筈で、例へば或る人が新に鳩の壻として大きな箱を拵へたこするこ、そこには幾十個かの空を明けて、小さな部屋を澤山に設けてあるに拘らず、幾つの鳩が何こしてか、同じ穴に這入らうこしてそこで止むを得ず相争ふやうになるやうだが若し彼等に智慧分別が相應に發達してゐたならば、それは直ぐ他に幾多の空處のあるこを知つて、折合ひもしやうし、讓合ひもしやう。戦争の頻繁なこは諸動物の愚呆性こ正比例を爲してゐるこいへる。斯くて一旦戦闘を開始したこしても、それが執念深く飽迄も他を苦しめ惱ま

すいふことはしない。敵が遁れて去れば、決して遠くは追掛けない。また敵が降伏すれば、それを強いて悉く破碎せなければ措かないさういふことはない。無抵抗者を強迫するさういふことはしない。由是觀此ても諸動物中には戦争はあつても、好戦性のないことは分からう。

否これは獨り鳩類ばかりではなく、獅子の様な猛獸でも亦さうらしい。それいふのも、由來獅子は猫の大なるものさ看られるさするさ、猫の上から推して考へるさ、思半に過ぎるさ事があらう。これがクレীগ氏新研究の大要である。文中猫と獅子との一節は、一寸聞くさ變な様で、自分共は常に虎を畫いて猫に類すさ云つてゐるが、併してこれでも亦固より差支はない様にも思はれる。

そこで問題は更に一步を進めるやうになるさいふのは、右クレীগ氏の研究報告のやうに、人類以下の諸動物の中には、只利益衝突の場合に於てのみ、己むを得ず戦闘するさとしても、それには毫も好んで他を破壊して以て、快を食らうさするやうな悪い根性はなく、従つてそこには防禦戦があるばかりで攻撃戦はない。動物中で掠奪強盜のあるのは、僅に夫の蜂蟻類のやうな、その中に寄生者のあるものに限るさ謂つて可なる程である。それに何故にや吾儕人間は萬

物の靈長さ謂ひながら、爾く好戰的であり尙武的であり、防禦のみかは攻撃侵畧をも敢てして憚らないのであらう。大に不審の情に堪へない。勿論今日は吾儕人間もまた大抵戦争は萬己むを得ずして起すもので、防禦戦のみ有理さすべく、無名の師を起して、徒に他を攻撃するさことは悪い事さしてあるさ云つてゐるらしい。併しそれも餘り當てにはならぬやうだし、尙ほ昔では随分攻撃侵畧を敢てして得意でゐた場合が多い。吾が國も明治維新後の諸大戦は、日清間のものにして、日露間のそれにして、將又世界大戦に参加したのにして、皆東洋平和のためさいふ觸れ出しであるが、昔のは神功皇后の三韓征伐、豊太閤の文祿の役でも、固よりさうは行くまい。

三

否それよりも更に驚かれるさことは、戦争は凶事さころか、却て善事であり、國民の運命から觀ては固より決して詛ふべきものではないさいふ説さへある。即ち戦争がなかつたならば、國民は終に墮落して仕舞ふさことは、古來適確の例證多々あるさする。従つて戦勝の名譽は、今も尙ほ何ものよりも大きなものさ看られて居り、一旦凱旋の祝砲が轟き、萬人歡呼の聲が巷に滿

ちては、戦場の苦痛も、後援の遣り繰り算段に於ける重い負擔も、俱に共に早く忘却して、皆々酣醉の態であり、死者をして死者を葬らしめよなき云つて、一將功成り萬卒骨枯るゝも、恬然として毫も怪まないのも不思議はない。然り而して戦争は固より營に防禦戦として正當であるばかりでなく、攻撃戦亦正當な場合も多々あるとするらしい。乃ち西洋の諺にも、血を流すことなくて、罪科を赦免することはない云つてゐる様に、所謂膺懲の事は當然であり、弔合戦なきも亦固より無意義は謂へないとする。ホップスが『レヴィアサン』の中に於て、戦争では暴力と詐欺とが道德であるなき云つてゐるのも、看方に由つてはさうらしくもあり、俗に嘘も方便云ひ、又哲人の中にも、随分目的は方便を義とす云つて居るものもある。仁義の師と謂ふもの亦實際に絶無なきと唱へられてゐる。

況してそれが兵士の上に及ぼし、延いて廣く國民子弟の上に影響する道德的感化の効偉大なるものがあるのを觀ては、尙更戦争を漫に凶惡視するのを許さないだらう。凡そ軍人の主要なる徳目は、名譽を重んじ、武士に二言なく、義務に誠實なきいふ事である。それからして生を鴻毛の輕きに比し、義を泰山の重きに輕べることに成り、不惜身命で、他の犠牲となることに

を喜び、欣然と笑つて死ぬ様にもなる。否更に之れをその平素の言行の上に徴して見ても、軍人は常にその僚友と腕を組み合せて仲好く交り、同情心に富んで水火の中をも辭せず、共同利益の爲に忠實であり、祖國の爲に奉公に熱心で、愛國心は盛に燃えてゐる。然り而してその日常の心掛としては、強壯にして剛勇に、何事にも忍耐して辛抱強く、朋友に信あり、上官に従順たることを専ら旨としてゐるのは、實に美はしいものこそ謂はなければならぬだらう。

尤も軍人一般には大に高慢で威張る様に見えるが、それは常人には許し難いとしても、軍人は威嚴を尙ぶものこそすれば敢て咎むることは須るない。軍人には又概して負債に困むものが多く、不義理の借錢に首の廻らないものも往々あるらしいが、それも錢勘定に不得意な爲とすれば、決して恥るに足らず。尙且つ軍人は兎角酒色に對しても、除外例とせられてゐる様で、それも全く銳氣を養ふ爲だと看れば、恕して可なりだなきと、彼の國の書物にも亦色々書いてある。若夫れ勝敗は天運で、而して勝てば官軍の俗諺の通りだきすれば、元來戦争の當否を極論するなきは、無用の沙汰であると放言して憚らざるに至つては、極端も亦甚しいと謂はざるを得ないが、事實はそんなものかも知れぬ。

之れを要するに、古今東西戦争の功用を唱説する者は敢て少しもしない。吾が國では建部博士の著書『戦争論』なきを参看したれば、大に得るところがあるだらう。併し自分としては固より到底戦争を凶惡視するこゝは止め難い。然り而して天下真に見識あり人情ある者は、皆夙に萬國平和の必要を鼓吹して止まないこゝは明である。即ち之れを大にしては國際聯盟や四國協約の如きものなり、而してデモクラシーも基督教もは相待つて、その完遂を助けやうと云つて居る様に看受ける。併しそれは實際は太だ覺束ない様で、如何なる借を拂つても只管平和を主張せんとするものは、畢竟臆病者の口實に過ぎないを看做されて居るから困る。自分までも亦聖初の通り、一旦緩急あらば義勇奉公は當然の義務を信じはするが、それにしても何さかして一日も早く永久無戦の状態に進ませたいと念じて止まない。知らずその方法は果して如何すれば好からうか。

これについて碩學カントが幾百十年の昔に於て、早く萬國平和の事を堂々唱道したのは、大に多きせなければならぬ。これは畢竟人格尊重自由尊重の徹底的個人主義から出てゐるやう。その後ベンサムも亦熱心に萬國平和を主張した様だが、これは申す迄もなく之の最大多数の最

大幸福を旨とする實利主義から來てゐる。而してそれを承けて又トルストイは純基督教徒の上から、尙武主義を非し、愛國心を無用とし、無抵抗を勧めて、以て一切の戦争を惡いとした。但しこのトルストイの説は極端で實施し難いこゝは贅辯を待たまい。

四

只從來の様に一も二も皆悉く愛國心々々々、頻に愛國心を尊重し鼓吹するのは考へものであらう。否同じ愛國心でも、國の爲に死ぬる教よりは、寧ろ國の爲に生きる教の方が貴い。ボサンケー氏の議論は大に傾聴するに足るものがある。蓋し之れを歴史に徴して見るも、苟くも愛國を謂へば、それは祖國の爲に戦うて身命を惜まざる事だを解するとは、古今東西その轍を同じくしてゐるらしい。支那の書物では愛國の文字は、始めて『戰國策』に見えてゐる。又日本では『日本紀』中の詔書にもある。前者は周君豈能無愛國哉と云ふだけで、格別の事もない様だが、後者は朕嘉厥尊朝愛國、賣已顯忠とあつて、己を賣り云ふのはやがて己の身を捨てる事であらう。併しそれよりも愛國の正解としては、夫の拉丁語の Dulce et decorum est pro

patria mor といふ一句が、よく人情を穿つてゐる様に思はれる。これは試に英語に直すに、

It is sweet and glorious to die for one's country となるだらう。詰り自國の爲に死ぬのは甘美にして名譽あることだ云ふのである。然かも其處には早く愛國を賣物にして、内實私腹を肥さんとする政治家や軍人も亦多々あることは、何處も似たものだらう。昔ジョンソンが愛國心なるものは横着者の最後の隠家であること云つたのは、一場の苦言ながら、今尙ほ痛切を感じざるを得ない。況して銜氣に出て、の忠義振りなさは、實に片腹痛い。これ特にボサンケー氏が愛國心の教養は、只是れ尋常一般の面かも眞摯なる忠實の心を徐に培養すれば足れり云つた所以であらう。

回顧すれば曾て那勃烈大帝が歐洲を席捲し、大小諸國を蹂躪して、獨逸に攻め入つた時は、普魯西國王はその妃と共に遠く東陸に蒙塵したのである。當時哲人フヒテは、獨り大帝の威武に屈せず、蹶然身を挺んでて伯林街頭に立ち、獨逸國民に告ぐいふ大演説を獅子吼したのである。然かも其處には希望や畏怖を道具に使つて、漫に煽動し激昂せしめる様な事はなかつた否それは只飽迄も自助を精神とし、愛を唯一の源泉とし、愛に由つて意志を刺戟し、以て人々一切の元氣を鼓舞すれば好いとしたので、一言以て之れを蔽はば、眞に善人を養成すれば足り

る云ふのである。乃ち教育を第一とし、やがて伯林大學の基礎が据ゑられ、侍に賢妃ルイゼがベスタロッチ一流の普通教育獎勵と相待つて、頓に國運隆興を見た次第である。爾來奕世普魯西國人は固より常に之れを國是としたに違ひはない。然かも前獨逸皇帝の如きはそれよりも寧ろヘーゲルの國家哲學を誤用し、ニーツエの起人論に魅了せられ、ベルンハルデーの軍國主義に心酔して、國家を至上とし、強力を權利とし、戰爭を有徳として、只管勝たんことを求めて己まなかつた爲に、終に大戰を醸して、可惜社稷を亡失し去つたのである。此の事は確に殷鑑させなければならぬ。

即ちボサンケー氏は固より必ずしも其處にコント一流の彪然たる一大人類社會を顯出せんとを期待せず、國家的存在としては、依然國民的・民族的に分立し列峙することには變はらなからうし、従つて又戰爭なるものも、吾儕人間の矛盾性からして、永くその間に跡を絶つことはあるまいと看てゐる様だが、それにしても各國民相勵んで眞善美に對する高尚の情操を涵養し、尙且つ一面には各國家内に於ける社會的秩序を整頓して、諸權利の按排を恰好ならしめ得たならば、屹度戰爭の數を少くすることが出来やう云つてゐるのは、大に吾が意を得てゐる。

但し強いて批判するに、このボサンケー氏の説は、哲學的であり、例の文化主義一遍で、或は實際にはさうかと思はれる節がないでもない。そこで又夫のノルマン・アンジェルなきは全然違つた方面より、戦争の非を痛論してゐる。それは今度の大戦に先だつと數年、有名なる論著を公にし、特に題して『大幻像論』と曰つてゐるところに注意を要する。蓋しこの外題は名詮自性で、一篇の論旨は實に是れ戦争なるものは敵にも味方にも算盤勘定の合ふものでなく、負けても勝つても共に大損ぢやないふことを論述したものである。即ちそれは戦争に由つて如何程廣大な領土を征服したとしても、その領土は固より携へて歸る譯に行かず、矢張り戦敗の被征服者の掌中にあるからには、折角領土を併呑したればして、戦勝國民は毫釐も利するところはないと云ふので、犠牲を拂つてもそれは實に無駄であるとするもので、曾てヴィクトリア女王治世五十記念祭の折、倫敦市中を賑に行列の練つて過ぎ行くのを傍觀してゐた一人の乞丐の私語は大に尤であるとする。曰はく我は濠洲・加奈陀・ニュージラント・印度・緬甸並に遠き太平洋中の群島をも領有してゐる。而して我は又麵麩の一片を得んとして得ず飢えてゐるのである。我は近世々界の最大強國國民であり、一切の人民は皆我が強大に對して伏拜する。然かも昨日

我は一人の黒色の蠻人に恭しく惠與を求めたところが、彼は嫌な顔付をして我を斥けた。なんぞ皮肉の言ではあるまいか。嗚呼、戦勝利益なきは結局一大幻像に過ぎず、眞に吾儕人類の諸利益は全く萬國平和の方に存するところは疑ない断言してゐる。

五

これがアンジェル氏の有名なる書物の要旨である。如何にも面白い。然るに米國のクラフトミ云ふ人は、近頃『萬國倫理學雜誌』(一九二〇年四月)に一文を投じて、これを批評し、それは實際には合しないとした。蓋し吾儕が戦勝に由つて得ん望むところは、固より決して眼前一時のことでない。永く子孫の爲にし、國民自家の將來を遠く慮つてするもので、現に蠻人の南阿に戦ふたのも、其處を自國民の勢力範圍とし、大腕を振つて出入し、終に悉く擧げて吾が獨占にしやうといふからで、又現にその通り行つてゐるではないか。それは畢竟人間にはそれぞれ人種擴張の本能があり、勃焉として抑さへ難く、やがてそれが不撓不屈の意志となつて、千難萬苦を冒して断行せられがちで、固より理窟詰にはならない。又それだから所謂國民的活動も出来る様な譯で、其處に衝突が生じ、戦争が起るのは、自然の數である云つて居る。只ク

ラフト氏の意見では、若し將來戦争を未然に防過しやうといふならば、それは何を措きても、吾儕人間の合理性を發揮して以て、夫の本能の盲目的衝動を嵌制することが必要である。それはレッキの所謂洗練されたる自利心を主眼とするので、他の宗教道徳家が動もすれば、人間一切の私慾を棄て去つたならば、萬國平和は出来るなき、輕々しく宣説するのは取るに足ない云つてゐる。想ふに這のクラフト氏の議論はアンジェル氏よりは一步を進めたもので、寧ろボサンケー氏に近い様だが、併しボサンケー氏は文化主義であり、クラフト氏は合理主義であるところは、固より一大相違であらう。

將又それとは全然別途に出で、米人ダシル氏は同じく近頃『米國社會學雜誌』(一九二〇年五月)に「國際主義の或る心理的部面」なる一編を寄せて、科學的根據に基づいて、萬國平和の確立すべき所以を論證しやうと云つてゐる。それは人類學上の研究から觀て、所謂人種的差別なるものは、固より決して千古不磨のものではない。それは環境に由つて漸次に變化し均一化せらるべきとは明である云ふので、米國に於ける幾多の實例を引いて證據としてゐるのは面白い。それは猶太人・シ、リ人・ボヘミア人・匈牙利人等に就いて調査して見るに、彼等の頭形や

身長なごも、その本國に居るものでは極めて區々で一定してゐない様だが、米國へ移住してからは、歳月を閱するに隨ひ、漸く變化して、何ごなく一定せんとする傾向あり、その生るゝ子は彼等祖先の固有の型式に遠かつて、寧ろ次第々に米人に近似せんとする様である。現に言語ごしても、英語が廣く異人種民族にも共通してゐる有様ではないか。否心理上の相違ごても亦果てしごこ迄固着的たり確定的たるかは分らない。總じて國民性ごか民族性ごか云ふごことは今日は多く政治上の意義で以て云々してゐる様だが、併し翻つて考へて見るに、それは只集團心理の發露で、而して所謂集團の形成は、必ずしもギツチングス氏の得意とする類同意識に由る譯でもなく、マックヅゴール氏なごの説では、その起原は寧ろ本能であり、人間固有の傾向で、群居的に性的に同情的に保底的に模倣的に動かうごするから出来るに過ぎず。ロツス氏は又それに加へて利害の共通を高調し、その基礎をこれに据ゑてゐるのを見るに、思半に過ぎやう。尙ほ實際は何處でもその集團形成の中核ごして何ものかを押し立て、諸事その周圍に纏繞してゐるのを見る様でもあるが、それは或は古風の愛國心なごでは、對象ごして必要であつたかも知れないが、今後は必ずしもそんなものを要しない様だごも論じてゐる。

自分は偶々このダシール氏の論文を一讀しつゝ、米國に於ける排日問題の解決は、從來の様に只々姑息の彌縫策のみを以て満足せず、是非共人道の大義に基づいた正々堂々たるものが案出されなければ嘘だと思へてゐる。それについてギユリック氏が先年來頻に日米の和合を倡道し、率先日本人の同化性に富んでゐることを高調したのは、大に吾が意を得てゐる。さうしても將來は益々この同化を奨励しなければならず、間違つた愛國論や國粹論は、斷じて排斥しなければならぬと確信してゐる。但し米國側の言ふところでは、文明の劣つた異民族の濫入は恰も雜草の蔓延して、可惜花卉を枯らし、その根を絶つ様に、早晚自國民の滅亡を招來するもので、實に由々しき大事だと思ふらしい。凡そ一國々運の盛衰は、會てマツクゾゴル氏も言つた様に、その國民構成分子の人種的優劣に係屬することが太だ多いと思ふ、これも亦輕々しく非難が出来ないかも知れない。

六

此の戦争の前途といふ事に就いては、今日は實際宗教よりも、社會主義の方が關係が多い様だ。それは概言すれば、社會主義者は概して非戰論者であり、又熱心なる萬國平和の倡道者で

あるからである。而して現に行はれつゝある國際聯盟的諸計畫は、その初は社會主義の影響を被つたかと思はれるのも少くない。此點に於て先づサン・シモンを看よと思ふ。彼は千八百十四年に早く歐羅巴共通議會開設の案を提出してゐる。然りそれは會議ではない、議會である。英國のその如く兩院制度で、由つて以て個々の政府と國民との間の爭議を調停しやうと思ふのである。斯くしてその門流には又夙に世界全人類の一般聯盟が主張せられ、それさへ甘く出来たならば、戦争は永遠に無くなるだらう。勿論それには國民的利己心も謂ふべき愛國心は措いて、人類博愛の心が高調せられなければならないと思ふ者が多々ある。フリーエやオーウエも亦固より同一思想であるが、然かもそれは大小次第々に階段的に編制された地方團體より出發して、幾多の中間者を経て、最頂點は全世界を一統したものと成るので、フリーエはそれをオムニアルク即ち全首長の下に置くとした。そのオムニアルクの居所をコンスタンチノブルに定めたなごも、却々面白い。斯くてマルクスやエンゲルスに至つても、亦依然國際的立場に於てし、千八百四十八年の宣言書には、萬國無産階級者の一致團結を絶叫してゐるのである。今日の所謂國際労働者聯合の組織は此に胚胎してゐると思へやう。但し社會主義者の

中にも亦稀には偏狹な國民的立場に立つたものもあるらしい。ラッサレやナウマンなどは寧ろ之れに屬するとも見られる。特に今度の大戰中には社會主義者にして銘々自國の爲に愛國的に熱狂した者は、獨佛英にも皆無きはしない。

此に於て自分は又アントン・メンガーの所見を一瞥しやう。メンガーの意見では、這の第二十二世紀の文明世界の一大破綻は、畢竟愛國主義的軍國主義の利益を主眼とする國際的傾向との相反の中に醸成せられるのだと見るので、年々歳々愈々増加して止まざる軍事的要求と、それと相提携して並進する警察政府の壓迫とは、全歐洲の下層階級を漸次革命化することに於て他の早く主要原因と看做されてゐる資本主義的方法の發達より、却て遙に力強いものがある様だ。國民皆兵の制度は、最強壯な無産者に、その血氣剛盛の時代に、吾儕は平時にも戰時にも吾儕は極めて縁遠い利害關係の爲に、最大犠牲を拂はなければならないとの、嫌な印象を刻銘して已まない。元來這の徵兵制度と謂ふものは、革命的民主的の佛蘭西が始めたもので、由つて以て從來の貴族的武力國家に於ける職業的軍隊に代へたものである。それを他の貴族的武力國家は漫然と模倣したのであるから、太だ變なもので、大戰前の獨逸では將校と下士卒との

分限區別は太だ截然たるものがあり、營内並に野外勤務に於ける將校の虐待は極めて甚しいもので、其處には早く軍隊内のデモクラシーを熱望する悲痛の聲があつた様だ。獨り英國では徵兵制度を採用せず、由來軍隊と警察との壓迫がないので、其處には早く資本主義的生産方法が非常に發達をしてゐるに拘らず、格別社會主義的革命的労働黨の發生を見るに至らなくて濟んでゐるに云つて居る。これは却々面白い觀察で、眞に一國永遠の安全を慮る者は、十分參考して慎思せなければならぬと附言するのも贅ではなからう。

今回の大戰に於て、英國貴族の卒先奮闘して、殉難を辭さなかつた健氣な振舞は、列國環視の中で大に注意を惹き尊敬を博した様だ。然かもこれ亦メンガーに據らば説明に難くあるまい蓋しメンガーの意見では、所謂愛國心なるものは、人性の裏に深く根ざせる自然の感情ではなく、寧ろ歴史的に種々錯雜せる條件の下に漸生した人工的現象であるに於るので、従つてそれは一國民々族中でも諸階級を通じて皆一様だとは謂へない。否それは當該階級の利益と國家の利益との關係密度の厚薄に由るものと見て好からう。即ちそれは勢、貴族・僧侶・軍隊並に官僚の中に最強く發達するので、換言すれば一國の支配者に對する利害共通上の忠義だと言へるに

すれば、英國貴族の振舞は當然であらう。

夫れ然り、中流階級の市民や農民階級の愛國心は、自ら貴族や軍隊や官僚のそれとは違つてゐる筈で、それは通例支配者も何等個人的に直接關係を有せず、只同胞國民も文化を共通せんとを意識するに過ぎないから、その愛國心は主として國土も國民もに對する同情に止まらう。尤も國民性や宗教の上からして、支配者も特殊の情義があれば、それは自ら別である。將又此等中流階級が政治的に他の特權階級に従屬して、離れ難い關係の在る時も、自ら右の通則には合しなからう。

若夫れ最後の貧民階級に至つてはさうか云ふも、彼等は概して支配者も何等の個人的關係もなく、又國土國民の上に文化共通の意識も乏しい……偶々あれば宗教上の事が主であらう……従つて現代に於ては無産階級の愛國心は比較的薄弱と云つて妨あるまい。そこで社會主義者は逸早く此等の勞働階級を聯盟せしめて、其處に一大世界國を作らうと企てた譯であるらしい。他の方面より觀れば、所謂世界國は固より征服では出来ぬに極つてゐる。此點に於てメンガーの言ふところは極めて明瞭で、氏は文明諸國の聯盟さへも亦格段の効果はあるま

いとし、その民衆的勞働國家が成立しても、其處には復勢力問題なきは重要視せられず、國家の活動が主として經濟目的のみに向けられる様に成つたとき、始めて經濟的任務を主眼とする世界國の建設が想像せられやうと云つてゐる。

七

右メンガーの所説を、一々吾が國の過去現在並に將來に於ける事情と對照して、説明し批判するときは、わざと遠慮したいが、讀者は熟讀玩味したならば、定めて釋然として理解するところがあらう。何しろそれは他の蕩々たる過激論者の様に、國家の存立を危くし、只國際的生存をのみ高調するものでないことは分かる。即ちその期待するところは、經濟的世界國の建設に外ならないのであることを認めなければならぬ。併しそれは又却々前途遼遠な様で、實際目前には經濟上にも亦盛に國民主義が行はれて、競争劇甚なるものがあり、將來戰爭の禍機も此處に伏在する様だから困る。此の事に就いてはペンシルヴァニアのバターソン氏が、近頃「米國政治學社會學院年報」(一九二二年三月)に載せた「新經濟的國民主義の危禍」を披見するよよく分かる。

その説に據るに、今現に斯く競争々闘の激烈なものには四つの原因がある。その一は世界の各方面に於て、此等各國の商業的に働いてゐる部分は、餘り隣接々近してゐる爲であり、その二は此等の大事業に投入した資本が巨額に上つてゐる爲であり、その三は事業の設備規模が急に擴張した爲であり、而してその四は事業の組織が組合の形式を取ることで、これ又第十九世紀に於て頓に増進した爲であるとする。然り而してその競争々闘如何を観れば、第一は關稅上の敵對であり、第二は利權讓與の争闘であり、第三は勢力範圍の擴張であり、第四は國際的借款である。今回の大戰でも亦實に此の競争々闘の結果を謂はなければならぬ。若しこれが已まない様では、如何に國際關係が喋々されても、それは又たさへ色々の協約が成立してゐても、固より決して戦争防遏の有効確實なる保證とはなるまいとする。

此に於て議論は再び元に戻つて、ボサンケー氏やクラフト氏の學說の上に及んで來るが、何はともあれ極端なる國民主義の教育や、偏狹なる愛國心の鼓吹は、國家安全の爲、人類福利の爲、將來は屹度戒めなくてはなるまいと確信する。凡そ這の緊要なる問題に就いては、自分は從來既に數々論辯し、警告して怠らない積りで「愛國心と偉人崇拜」「教育界の現状打破」並に

「國際聯盟と國民道德」「文化運動と教育傾嚮」の兩編は、今尙ほ一讀を勸奨したいが、それよりも今大正十一年七月出版の『教育夏季講習録』(同文館)に於て發表した「國際主義とその教育」は、時節柄誰人にも恰好の讀物だらうと考へる。即ち其處にも書いた様に、近頃米國カリフォルニア州の當局者は、日本人小學校の教科書に楠正成を始め、所謂忠臣義士の事蹟を載せたのを非し、その改正を求め、然らずんば學校の認可取消まで言ひ込んださうな。是の如きは又々例の排日的ひがみ根性から出て來た僻見と苦笑する丈けの事かも知らんが、それにしても又その後聞くところでは、今度英國に於ても歴史教育の方針を根本的に一新し、復々從來の様に只管國威國光を輝す雄舉壯圖を主とせず、寧ろ人類一般の文化に貢獻したと思はれる事實を重きするところになつたさうな。想ふにその手本は夫のウエルスの近著『世界史綱要』(邦譯は『世界文化史大系』と題す)なきにあらう。これは吾が國今後の教育上に於ても屹度注意すべき筈でたしへバートランド・ラッセル氏が人間自由の自然の成長を阻害するものは、宗教と歴史との教育だと言つたところが、尙ほ議論の餘地はあるにしても、何はともあれ此の際吾が所謂國民道德の教育方針には一大反省を促かさざるを得まい。國史・國語・國文乃至漢文の教育には、此の際一番

根本的に改廢するところがなくてはならぬ。少々大袈裟な誇張に過ぎるか知らないが、吾が國
將來戰爭に對する態度如何も亦これに由つて極まるを謂へやう。一時的反動も油斷はならぬ。
噫。

大正十二年五月十日^七印刷納本
大正十二年五月^{二十}日初版發行

日本はどう成る？

〔正價 金貳圓〕



著者 谷 本 富
發行人 武 藤 欽
印刷人 村 上 勘 兵 衛
京都市下長者町油小路西入
京都市西洞院通七條南入

發行所

文 獻 書 院

京都市神田區表神保町二番地(電話神田四四二一・日座東京六〇〇六一)
京都市下長者町油小路西へ入(電話西陣二五九七・日座大阪六三〇九二)

東京外國語學校講師 友枝照雄先生著 四六判クロース表装正價金壹圓八拾錢送料拾五錢

最新教科講座 國文新講 第一編

中學上級及高等學校程度の補習用自習用の目的を以て本書成る。選・週・到・註・譯・叮・嚅。又現代文を如何に説明し如何に教授すべきか著者の學識蘊蓄によりて、藎を本書に依りて示さる。普く滿天下に動む。

文學博士谷本富先生著 四六判美本正價金貳圓書留送料拾五錢

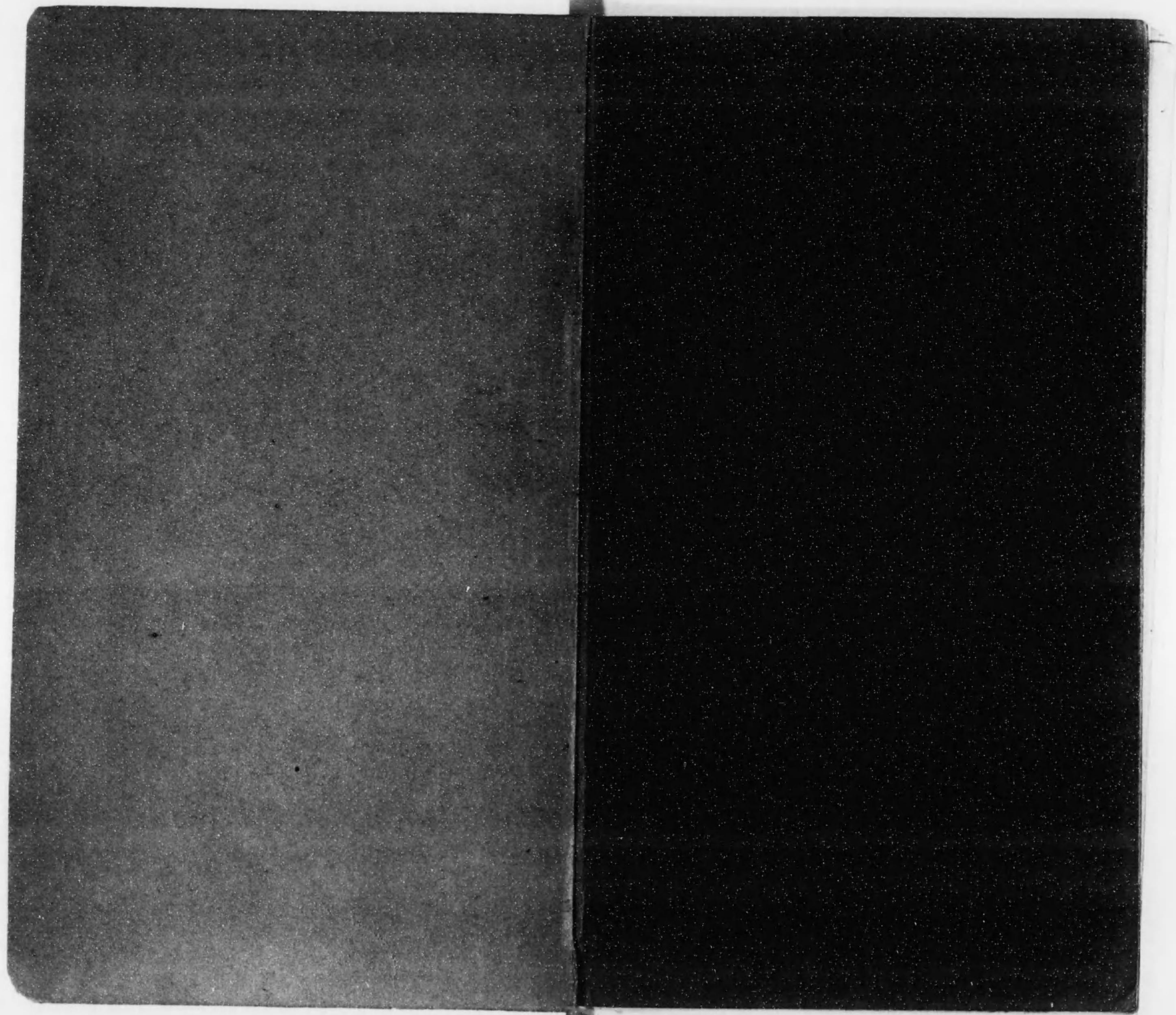
書齋より主婦と女學生へ

博士京都帝國大學を退いて野にある十年、常に該博なる蘊蓄と達見とを以て堂々の陣を張り所謂新時代の先覺たり、本書は婦人問題の解決に一大案を下されたるもの、博士一流の勁拔なる卓見を聞かすや。

京都帝國大學教授 加藤順三先生著 四六判絹裝幀美裝正價金貳圓書留送料拾五錢

近松戲曲新研究

巢林子の思蘊は古今獨歩である本書は著者の俊銳なる創見と考證とを以て前人未到の詩形及詞章の方面を考察し彼の藝術家としての他の半面を論究したるもの恰もこの二百年祭を記念すべき好著である



503
239

終